横枕古墳群Ⅲ

中国横断自動車道姫路鳥取線に係る
横枕38～40・92～94号墳の発掘調査

2007.12

財団法人　鳥取市文化財団

横枕古墳群 Ⅲ

中国横断自動車道姫路鳥取線に係る
横枕38～40・92～94号墳の発掘調査

2007.12

財団法人　鳥取市文化財団

序　　文

鳥取市は、平成16年11月に周辺８町村との合併を行い、面積765.66㎢、人口20万人あまりを擁する山陰地方最大の都市となりました。

鳥取市域には数多くの原始・古代遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人　鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した横枕古墳群の調査は、中国横断自動車道姫路鳥取線整備事業に係る発掘調査として、平成17年度及び平成19年度に行ってきました。この古墳群は千代川左岸の丘陵部に展開し、91基あまりの古墳で構成されていることが知られていましたが、今回の調査によって新たに古墳３基を発見することができました。また、土器、玉類、鉄刀、鉄鏃をはじめとする鉄器などの副葬品が出土し、当地域の歴史を探る上で貴重な資料を得ることができました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆さまをはじめ多くの方々の地域の歴史を考える一助になれば幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様、ご指導・ご助言を賜りました関係各位に心から感謝するとともに、今後とも発掘調査にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年12月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　山崎祥次

例　　言

1．本報告書は、中国横断自動車道　姫路鳥取線整備事業に係る事前調査として実施した横枕（よこまくら）古墳群の発掘調査報告書である。
2．本発掘調査は、平成17年度に西日本高速道路株式会社中国支社の委託を受けて、財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センターが現地調査を実施し、平成19年度に中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて、財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センターが整理・報告書作成業務を実施した。
3．発掘調査遺跡の所在地は、鳥取市上味野字堤下タ746、字天王谷485である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5．遺跡の航空写真撮影、現地の基準点測量および地形測量は専門業者に委託した。
6．現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測・浄書は、神谷伊鈴、濱橋博子を中心として行った。出土遺物観察表は神谷伊鈴が作成し、濱橋博子が補佐した。
7．本書の執筆、編集は前田均が担当し、神谷伊鈴、濱橋博子が補佐した。
8．現地調査および報告書作成にあたって多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。厚く感謝いたします。

凡　　例

1．本書における方位は、真北の第１図を除き他は座標北を示す。また、レベルは海抜標高である。
2．本書で使用した遺構の略号は、土坑；SK、溝状遺構；SDである。
3．今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、古墳名、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。
（例；2005　姫鳥 横枕39M No012 2006.03.04）

本 文 目 次

序文
例言
凡例
第１章　発掘調査の経緯
　１．発掘調査にいたる経緯……1
　２．発掘調査の経過……1
　３．調査の組織・体制……2
第２章　遺跡の位置と歴史的環境……3
第３章　調査の結果
　第１節　横枕古墳群の立地と構成……7
　第２節　横枕40号墳の調査
　　１．横枕40号墳……7
　第３節　横枕38、39、92、93、94号墳の調査
　　１．横枕38号墳……12
　　２．横枕39号墳……25
　　３．横枕92号墳……31
　　４．横枕93号墳……35
　　５．横枕94号墳……40
　　６．遺構外出土遺物……40
　（出土遺物観察表）
　第４節　まとめ……46
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図　横枕古墳群周辺遺跡分布図……5
第2図　横枕古墳群調査地位置図……6
第3図　横枕40号墳調査前地形図……8
第4図　横枕40号墳墳丘遺存図……9・10
第5図　横枕40号墳墳丘断面図……9・10
第6図　横枕40号墳主体部実測図……11
第7図　横枕40号墳出土遺物実測図……12
第8図　横枕38・39・92・93・94号墳
調査前地形図……13・14
第9図　横枕38・39・92・93・94号墳
墳丘遺存図……15・16
第10図　横枕38号墳墳丘断面図……18
第11図　横枕38号墳第1主体部実測図……19・20
第12図　横枕38号墳第2主体部実測図……21
第13図　横枕38号墳出土遺物実測図(1)……22
第14図　横枕38号墳出土遺物実測図(2)……23
第15図　横枕38号墳出土遺物実測図(3)……24
第16図　横枕39号墳主体部実測図……25
第17図　横枕39号墳墳丘断面図……26
第18図　横枕39号墳周溝内遺物実測図……27
第19図　横枕39号墳出土遺物実測図(1)……27
第20図　横枕39号墳出土遺物実測図(2)……28
第21図　第1石棺実測図……29
第22図　第2石棺実測図……30
第23図　第2石棺出土遺物実測図……31
第24図　横枕92号墳出土遺物実測図……32
第25図　横枕92・93・94号墳墳丘断面図……32
第26図　横枕92号墳石室実測図……33・34
第27図　横枕93号墳石室実測図……35
第28図　横枕93号墳石室内遺物実測図……36
第29図　横枕93号墳出土遺物実測図(1)……37
第30図　横枕93号墳出土遺物実測図(2)……38
第31図　横枕93号墳出土遺物実測図(3)……39
第32図　横枕94号墳主体部実測図……40
第33図　遺構外出土遺物実測図……41

図版目次

図版1　調査地全景(南東上空から)
横枕38・39・92・93・94号墳全景
(南東上空から)
図版2　横枕40号墳調査前(南西から)
横枕40号墳全景(上空から)
横枕40号墳全景(南西から)
図版3　横枕40号墳主体部検出状況(南東から)
横枕40号墳主体部埋土状況(南西から)
横枕40号墳周溝埋土状況(北西から)
図版4　横枕38号墳全景(上空から)
横枕38号墳墳丘遺存状況(北東から)
横枕38号墳周溝埋土状況(西から)
図版5　横枕38号墳第1主体部検出状況(南西から)
横枕38号墳第1主体部検出状況(北西から)
横枕38号墳第1主体部埋土状況(北東から)
図版6　横枕38号墳第1主体部遺物出土状況
(北西から)
横枕38号墳第1主体部遺物出土状況
(北東から)
横枕38号墳第1主体部遺物出土状況
(北西から)
図版7　横枕38号墳第2主体部蓋石遺存状況
(南西から)
横枕38号墳第2主体部石棺検出状況
(南東から)
横枕39号墳調査前(南西から)
図版8　横枕39号墳全景(上空から)
横枕39号墳墳丘遺存状況(南西から)
横枕39号墳周溝埋土状況(南東から)
図版9　横枕39号墳主体部検出状況(北西から)
横枕39号墳主体部埋土状況(南東から)
横枕39号墳周溝内遺物出土状況(西から)
図版10　第1石棺検出状況(南西から)
第2石棺検出状況(南西から)
第2石棺遺物出土状況(南東から)
図版11　横枕92号墳全景(上空から)
横枕92号墳羨道部遺存状況(東から)
横枕92号墳羨道部埋土状況(東から)
図版12　横枕93号墳全景(上空から)
横枕93号墳石室埋土状況(西から)
横枕93号墳玄室検出状況(南から)
図版13　横枕93号墳周溝埋土状況(北東から)
横枕93号墳玄室内遺物出土状況(西から)
横枕93号墳玄室内遺物出土状況(南から)
図版14　横枕94号墳全景(上空から)
横枕94号墳主体部検出状況(北東から)
横枕94号墳主体部埋土状況(北東から)
図版15　横枕40号墳出土遺物　横枕38号墳出土遺物
図版16　横枕38号墳出土遺物
図版17　横枕39号墳出土遺物　第2石棺出土遺物
横枕92号墳出土遺物　横枕93号墳出土遺物
図版18　横枕93号墳出土遺物　遺構外出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

１．発掘調査にいたる経緯

横枕古墳群は、鳥取市横枕、竹生、上味野に広がる標高30～150mあまりの丘陵上と、その裾部に展開する古墳群である。山裾部には露出した横穴式石室の存在が古くから知られていたが、姫路鳥取線の整備計画が示された後に実施した分布調査などによって、50基余りの古墳や、遺物散布地が新たに確認され遺跡密度の高い地域であることが明らかになった。そのような中、中国横断自動車道計画の具体化とともに計画路線内における遺跡の所在確認のため本格的な試掘調査が行われた。試掘調査は鳥取市教育委員会が平成11年度～13年度に実施した。鳥取市教育委員会はこれらの試掘結果をもとに関係機関との協議を行ったが、路線内の遺跡は現状での保護・保存が難しく、記録保存で対応することとなった。

本調査は、調査が可能となった区域から順次実施され、平成11年度に服部墳墓群、12年度に服部墳墓群、下味野古墳群、横枕古墳群、13年度に横枕古墳群、篠田古墳群、下味野古墳群、14年度に篠田古墳群、下味野古墳群・下味野童子山遺跡、本高円ノ前遺跡、15年度に倭文古墳群、倭文所在城跡、横枕古墳群の調査を実施した。その後、横枕古墳群、横枕所在遺跡２（仮称）については唯一未調査となっていたが、平成17年度に入り調査が可能となったことから、同年12月から現地調査に着手した。なお、本報告の横枕40号墳、横枕38号墳の一部について平成16年度に調査を行っており横枕古墳群概要報告書で報告している。

２．発掘調査の経過

今回の調査対象地は、横枕集落の北東側に張り出した丘陵の標高80.8m前後の先端頂部と、その丘陵南東斜面を下った標高34.5mあまりの裾部に当たり、頂部に横枕40号墳、裾部に横枕38、39、92～94号墳が所在している。事業計画当初、計画路線内における遺跡管理名として丘陵線に所在する古墳について横枕古墳群、裾部一帯に立地する遺跡については横枕所在遺跡２と呼称していたが、今回の報告では裾部に立地する各古墳についても横枕古墳群として取り扱った。

現地調査は、西日本高速道路株式会社中国支社の委託を受け、平成17年12月から実施した。調査準備および発掘調査資材や機材の現地搬入の後、立木の伐採・搬出作業の終了をまって12月14日から調査区域の基準点測量、地形測量、調査前写真撮影を行い、終了後直ちに表土除去作業、墳丘検出作業に着手した。作業は調査区の北東側に位置する39号墳から行い、38号墳、92号墳、93、94号墳へと進めていったが、度重なる降雪に悩まされながらの作業となった。２月中旬に墳丘検出作業を終え、土層観察ベルトの断面記録、ベルト除去、墳丘遺存状況の写真撮影の後、２月18日から各古墳の埋葬施設の検出に取りかかった。検出の結果、38号墳の墳頂部から木棺直葬とみられる埋葬施設１基、墳丘裾部から箱式石棺１基が検出された。墳頂部の埋葬施設は大型のもので、須恵器、鉄刀、鉄鏃などの鉄製品や管玉、小玉等の玉類が副葬されていた。また、39号墳の墳頂部からも木棺直葬とみられる埋葬施設１基と墳丘外から石棺２基が検出された。さらに、92、93号墳は残存状態が不良であるものの横穴式石室を持つ古墳であることが明らかとなった。93号墳の玄室内からは須恵器、土師器のほか、鉄鏃、刀子等の鉄製品が出土した。埋葬施設の平面、断面実測、写真撮影等の諸記録を取ったのち墳丘調査を行い38、39、92、93、94号墳の調査は３月27日に終了した。

丘陵頂部に立地する40号墳の調査は３月１日から本格的に開始した。表土除去、墳丘検出作業ののち埋葬施設の検出作業を行い、墳頂部の中央から直葬と思われる墓壙１基を検出した。諸記録を取ったのち墳丘調査を行い３月27日に調査を終了した。

各古墳の埋葬施設の検出をうけ、３月24日には調査区全域および各古墳の空撮を行った。

整理作業および報告書作成は、中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受け、平成19年８月から

実施した。調査記録の整理と出土遺物の水洗、注記、復元等の作業を終えたのち報告書の作成に本格的に取りかかり、平成19年11月に一連の業務を終了した。

3．調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成17年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団

理事長　林　由紀子(鳥取副市長)
副理事長　中川俊隆(鳥取市教育長)
三田三香子
常務理事　小谷莊太郎

調査指導　鳥取市教育委員会　事務局文化財課

事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター

所長　前田均
主幹　藤本隆之
主幹　谷口恭子
調査事務　秋田澄世

調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター

調査員　井汲隆夫
前田均
調査補助員　神谷伊鈴
永田りん太郎
下多みゆき

平成19年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団

理事長　山崎群次
副理事長　住田高市
三田三香子

調査指導　鳥取市教育委員会　事務局文化財課

事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

所長　前田均
所長補佐　山田真宏
主幹　谷口恭子
調査事務　秋田澄世

調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

調査員　前田均
調査補助員　神谷伊鈴
濱橋博子

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

横枕古墳群は、千代川西岸の鳥取平野南西部に位置し、横枕集落背後の八町山(標高294m)から派生する丘陵および集落前面の低丘陵に展開する古墳群である。古墳群が立地する丘陵東側には千代川が南北に流れ、幅１㎞余りの平野部が形成されており、この平野部を望む丘陵上に多くの古墳が築かれている。

今回の調査地は、横枕集落の北東約600mに位置し、標高80.8mあまりの丘陵上と、丘陵の南東斜面を下った標高34.5m前後の裾部に所在する。前面には標高50mあまりの独立丘陵があり、丘陵間には微高地状の平野部が形成され、水田や畑地として利用されている。

鳥取平野に最初に人の足跡がたどれるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。

縄文時代の遺跡としては、湖山池南東岸の低湿地に立地し、丸木舟が相次いで出土し話題となった桂見遺跡や、漆塗で木製の広口壺や腕輪が出土し高度な漆技術が示された布勢第１遺跡が後期を中心とする著名の遺跡として知られている。横枕周辺では晩期の突帯文土器が出土した本高円ノ前遺跡や、縄文時代後期後葉から晩期前葉に比定される土器群が出土した山ヶ鼻遺跡、千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡などが位置しており、後期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移していく状況がうかがわれ、晩期後半になると平野中心部の微高地へ進出するようである。

弥生時代に入り、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれる。前期の実態は不透明な部分が多いが、青島遺跡、湖山第１・２遺跡、布勢第１遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、天神山遺跡からは前期の遺物が出土している。このような中でも、岩吉遺跡は古い要素をもつ弥生土器が出土しており、鳥取平野で最初に稲作を導入した拠点集落と考えられている。

横枕古墳群周辺の弥生遺跡としては、焼失竪穴住居から弥生中期の土器がまとまって出土した下味野童子山遺跡や、弥生時代後期の土器とともに田下駄、大足などの木製品が検出された服部遺跡、後期を主体とする竪穴住居や土坑、掘立柱建物などが検出された北村惠儀谷遺跡、中期中葉～後期の土坑や重複する溝状遺構が検出された山ヶ鼻遺跡、菖蒲遺跡が知られている。いずれも標高７～10m程度の微高地に立地する遺跡である。

鳥取平野における弥生時代の墳墓は湖山池南東岸地域に多くみられ、布勢鵠指奥１号墓、第１土壙墓を中心とした桂見土壙墓群、一辺64×高さ５ｍと傑出した規模をもつ西桂見墳丘墓、丘陵頂部に位置し、石列と地山の浅い掘削によって12mの方形状に墓域を区画している桂見土壙墓群が知られており、古墳時代に続いていく墳墓として注目されている。

古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上に大小さまざまな古墳が造られるようになる。初期段階では湖山池南東岸の桂見古墳群、倉見古墳群などを中心として展開されるが、これらは弥生時代からの系譜を引く方墳である。桂見２号墳は長辺28m×高さ4.5mの規模で長大な木棺から舶載鏡が出土している。大規模な埋葬施設や副葬品など、このように卓越した内容の古墳は今のところ明らかになっていない。横枕古墳群周辺では、釣山24号墳(長辺22m、方墳)、銅鏡が出土した古海40号墳が前期古墳として知られている。中期になって、前方後円墳として里仁29号墳(全長85m)が、やや遅れて栃岡１号墳(全長92m)、古海36号墳(全長67m)などが点在する。後期には墳丘規模が全体的に小型化する傾向があり、三浦１号墳(全長36m)、桂見６号墳(全長24.5m)、釣山２号墳(全長26.4m)等のように小規模な前方後円墳も築造される。このような後期古墳の中で、野坂川右岸の丘陵東側斜面に立地する山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は巨石を刳り抜いた石棺式石室を埋葬施設に持っている。７世紀中頃の築造であり、その特徴的石室構造とともに数少ない後期～終末期古墳として、７世紀後半に創建されたと考えられている菖蒲廃寺につながる貴重な存在である。

古墳時代における集落の調査例は少ないが、古墳の立地する丘陵の後背地微高地上、現集落と重なっ

て営まれたものと推察されている。横枕古墳群周辺の集落遺跡として菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡、大桝遺跡等がある。菖蒲遺跡では釣山裾の微高地に焼失住居が検出されている。

7世紀に入ってからのこの地域は、白鳳後期創建とされる菖蒲廃寺に象徴される。菖蒲村周辺は古代山陰道の通過地点とともに駅衙、郡家の推定地でもあり、律令期に入って鳥取平野西岸の中心的地域であったと考えられている。現在、菖蒲集落の西に菖蒲廃寺の塔の心礎とみられる礎石が残り、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。またその250m西の山ヶ鼻遺跡では、菖蒲廃寺の時期と重なる7世紀の掘立柱建物群、溝状遺構、土坑等が検出されており注目される。横枕周辺では倭文神社が式内社であり、古代新羅系の織布技術をもった集団である委文部がこの地域に居住していたと推定されている。また、律令体制下のこの地域は、天平勝宝7年(755)、『東大寺東南院文書』「東大寺領因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」から南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっている。この時期、菖蒲遺跡では釣山沿いの微高地に8世紀後半の総柱建物が検出されている。また、9世紀後半の墨書土器のほか中世京都、近江産の緑釉陶器片とともに、白磁片、青磁片が多数出土していることから高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあったと考えられ、注目すべき地域となっている。

引用・主要参考文献

鳥取市『新修鳥取市史　第1巻　古代・中世篇』1983年

鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『岩吉遺跡Ⅲ』1991年

鳥取市遺跡調査団『釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ』1992年

㈶鳥取市教育福祉振興会『古海古墳群・菖蒲遺跡』1993年

㈶鳥取市教育福祉振興会『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』1996年

㈶鳥取市教育福祉振興会『桂見遺跡群』1998年

—第1図　遺跡名称—

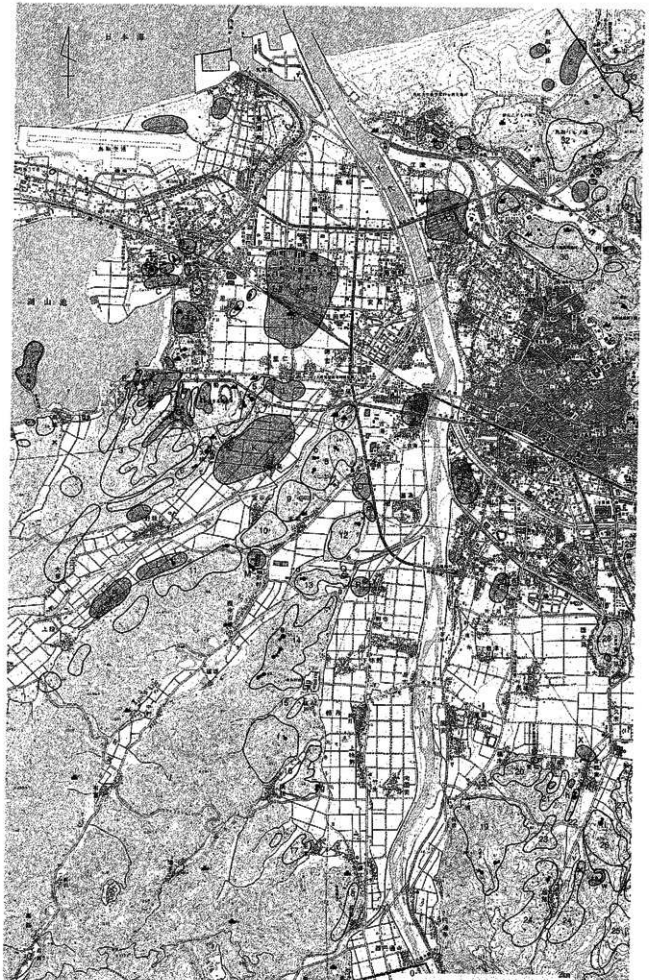
1．大熊段古墳群
2．三浦古墳群
3．桂見墳墓群
4．布勢橋掘奥墳墓群
5．里仁古墳群
6．桝岡古墳群
7．徳尾古墳群
8．古海古墳群
9．本高古墳群
10．宮谷古墳群
11．小森山古墳群
12．釣山古墳群
13．服部墳墓群
14．下味野古墳群
15．福田古墳群
16．横枕古墳群
17．玉津古墳群
18．長谷古墳群
19．八坂古墳群
20．橋本古墳群
21．美和古墳群
22．古都家古墳群
23．國原古墳群
24．越路古墳群
25．空山古墳群
26．六部山古墳群
27．船木古墳群
28．大路山古墳群
29．面影山古墳群
30．雁金山古墳群
31．円護寺古墳群
32．開地谷古墳群
33．湯山古墳群

A．秋風遺跡
B．岩吉遺跡
C．湖山第2遺跡
D．天神山遺跡
E．西桂見遺跡
F．桂見遺跡
G．東桂見遺跡
H．布勢第1遺跡
I．布勢第2遺跡
J．里仁遺跡
K．大桝遺跡
L．小森山遺跡
M．北村惠俵谷遺跡
N．古海遺跡
O．山ヶ鼻遺跡
P．菖蒲遺跡
Q．本高円ノ前遺跡
R．服部遺跡
S．古市遺跡
T．宮長竹ヶ鼻遺跡
U．橋本遺跡
V．越路銅鐸出土地
W．七谷銅惠器窯跡群
X．久末・古都家・大路川遺跡
Y．西大路土居遺跡
Z．迫後遺跡

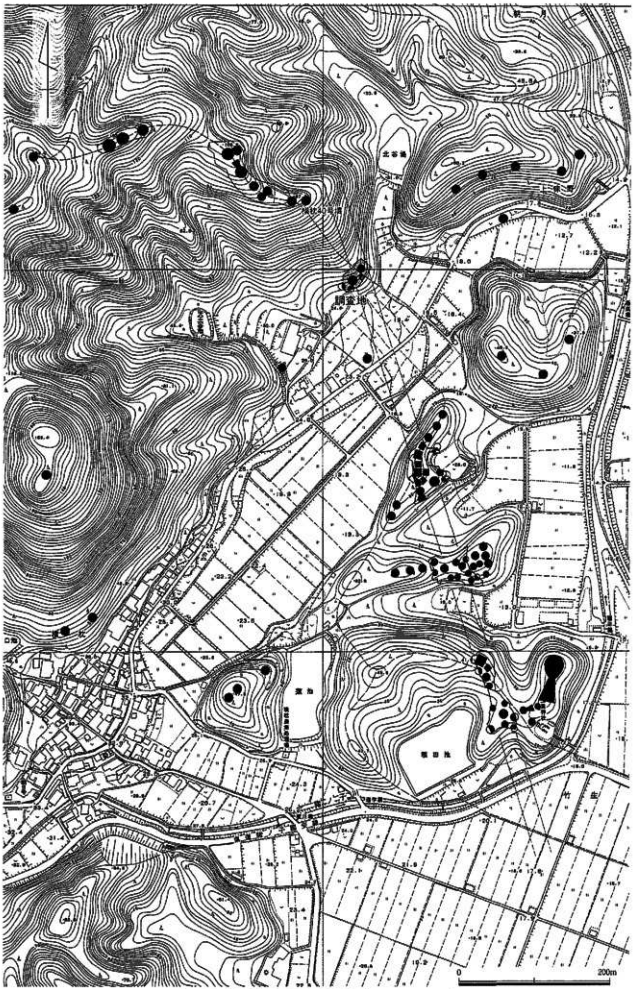
a．西桂見墳丘墓
b．桝岡1号墳
c．古海35号墳
d．服部23号墳
e．下味野23号墳
f．横枕55号墳
g．横枕13号墳
h．古都家1号墳
i．六部山3号墳

—凡例—

集落遺跡・遺物散布地
墳墓群・古墳群
主要古墳
横穴
城跡



第1図　横枕古墳群周辺遺跡分布図(S＝1：50,000)



第２図　横枕古墳群調査地位置図（Ｓ＝１：5,000）

第３章　調査の結果

第１節　横枕古墳群の立地と構成（第２図）

横枕古墳群は、鳥取市横枕および竹生、上味野地内の一部に所在し、横枕集落の西側に位置する八町山（標高294m）から東側へ延びる丘陵と、横枕集落の東側前面に形成された独立丘陵の標高25～150m程度の丘陵上およびその裾部に展開している。平成10年度までの横枕古墳群は40基あまりが知られていたが、その後に進められた浄水施設整備事業や姫路鳥取線道路整備事業などの大型開発事業に伴う調査で基数を増し、今回の調査で新たに確認された３基の古墳を含め、現在までに計94基の古墳が確認されている。周辺丘陵上には、儛文、玉津、篠田、下味野等の古墳群が展開しており、下味野23号墳（全長73.5m）、横枕13号墳（全長70m）などの前方後円墳の存在とともに鳥取平野の中でも多くの古墳が築かれている地域となっている。

横枕古墳群の調査は、平成11～13年に浄水施設整備事業に伴い横枕41～44号墳、52～58号墳、平成12、13、15年度には姫路鳥取線道路整備事業に伴い横枕10、11、22～26号墳、36、41、59～64号墳、67～91号墳が発掘されている。平成11～13年度に行った調査は、標高95～138mの尾根上に築かれた古墳が対象となった。調査の結果、標高138mの丘陵高位から横穴式石室を内部主体とする44号墳、古墳群中３例目となる小型前方後円墳の55号墳の他、直径14.8mの円墳で木棺直葬の埋葬施設を持つ43号墳等が検出され、古墳時代後期に築造された古墳で一群を構成していることが明らかとなった。また、平成12、13年度の調査は、横枕集落前面に位置する標高25～34mあまりの独立低丘陵に所在する39基の古墳を対象に行われ、古墳時代前期、中期、後期の古墳が隣接して築かれていることが確認された。これらの調査から、横枕集落背後の丘陵上には後期古墳が築造され、独立丘陵上には古墳時代前期から継続的に古墳が築造された状況が明らかになってきている。古墳築造の素地となる集落遺跡の存在ははっきり確認されていないが、前期～後期古墳が築かれている状況からみて安定した生活基盤を有していた地域であったことが予想される。

第２節　横枕40号墳の調査

1. 横枕40号墳（第３～７図、図版２、３、15）

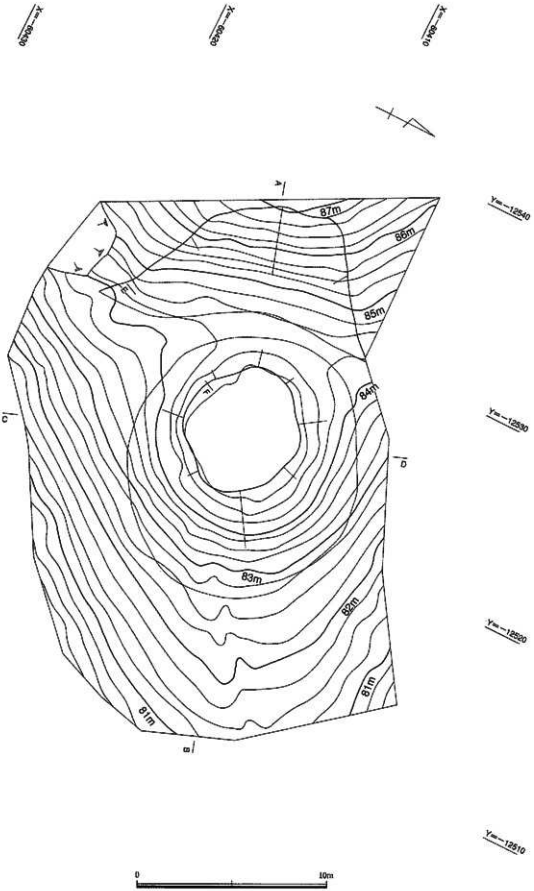
〔位置と現状〕

横枕40号墳は、標高82.75～85mの尾根上に立地する。同一尾根上の高位には10基あまりの古墳が連続的に築造されており、40号墳はこれらの古墳の中で最下位の尾根先端部に位置している。古墳からの眺望は開け、千代川流域の平野部を望むことができる。調査前の古墳は、尾根の上位側にははっきりした周溝の痕跡が認められ、２m以上の高まりが観察されることから、良好な遺存状態の古墳であることが予想された。

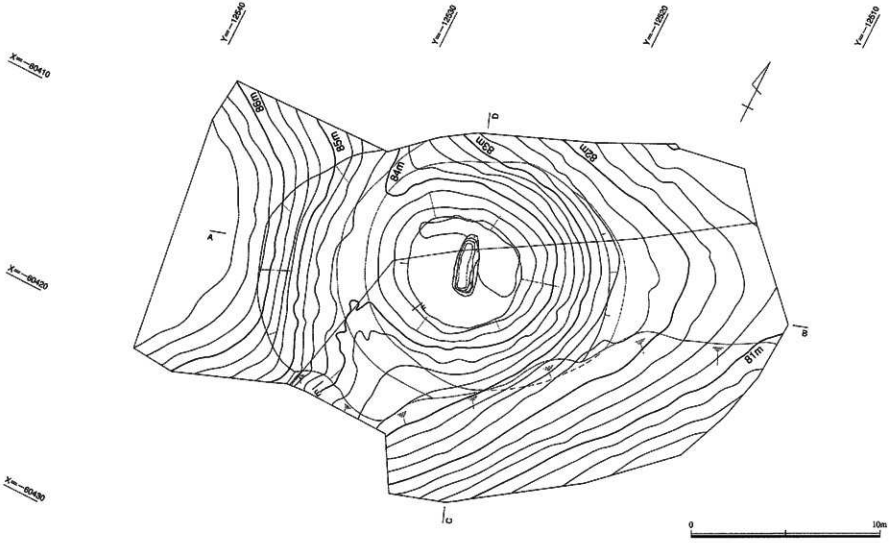
〔墳丘〕

厚さ5～15cmの表土下で墳丘面を検出した。墳形は円墳で、全体に良好な状態で遺存している。墳頂部の標高は84.8m前後を測る。墳丘規模は、北東裾から南西裾まで径13.9m、北西裾から南東裾で12.1m、墳丘の高さは北東裾から2.4m、南西周溝底から0.85mである。

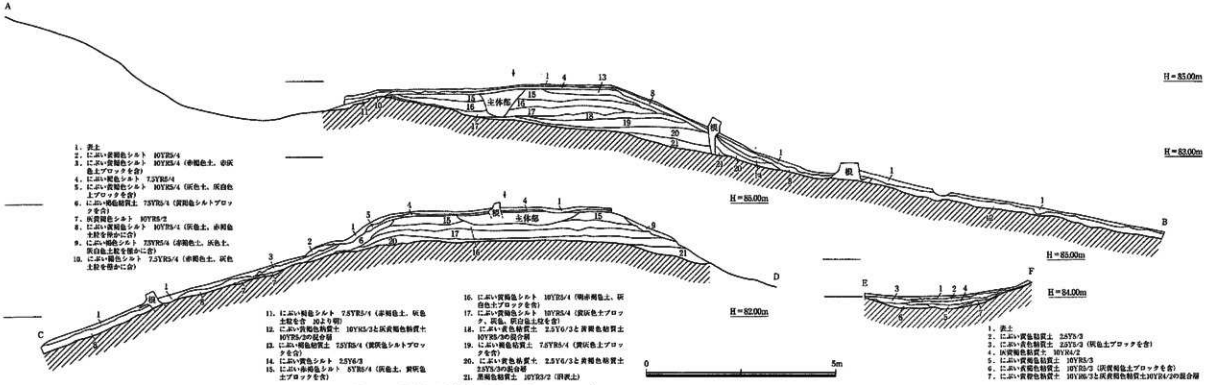
墳丘の築造は、尾根の高位側を巡る周溝の掘削と盛土によって行われている。周溝の掘削は大きく行われ、幅４mあまりにわたって馬蹄形に地山を削りだしている。盛土は、墳頂部北東側で1.05m、南西側で10cmあまりが確認され、北東側では旧表土とみられる黒褐色粘質土（21層）の上に行われている。第５図の６、15～20層が墳丘築造時の盛土とみられ、尾根上の緩傾斜地を利用し、大量の盛土を行って墳丘を築いていることがうかがわれる。



第３図　横枕40号墳調査前地形図(S＝１：200)



第４図　横枕40号墳墳丘遺存図(S＝１：200)



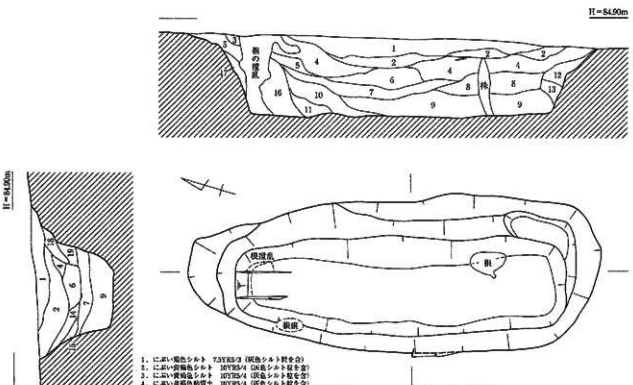
第５図　横枕40号墳墳丘断面図(S＝１：100)

〔埋葬施設〕

墳頂部のほぼ中央から墓壙1基を検出した。主軸はN-18°-Wにとり、尾根の稜線に概ね直行している。平面形は不整形な隅丸長方形で、南東側で幅を増している。規模は、長さ3.26m、南東側の幅1.14m、北西側の幅0.6m、深さ62cmを測る。墓壙底面は長さ2.39m、幅0.36～0.48mで平坦に整えられているが、平面形はやや湾曲気味となり不整形である。墓壙埋土の断面観察では木棺の痕跡が認められず、また、底面の不整形な平面形等から推察して直葬と考えられる。埋葬施設内からは遺物は検出されなかった。

〔出土遺物〕

墳頂部の墳丘面と墓壙埋土上層から須恵器蓋杯の杯身(第7図1)、北東側墳丘裾部の表土下から鉄鉾(2)が出土した。杯身は、立ち上がりが内傾し、端部は僅かに段をもつ。鉄鉾は先端部をわずかに欠き、残存長18.82cm、身部長6.20cm、袋部長12.62cmを測る。袋部内部に木質痕が残る。



第6図　横枕40号墳主体部実測図(S＝1：30)

第７図　横枕40号墳出土遺物実測図

第３節　横枕38、39、92、93、94号墳の調査

横枕38、39、92、93、94号墳は40号墳が立地する尾根上から南東斜面を下った、標高29～35mの丘陵裾部に近接して築かれている。前面には狭い平野部が形成されており、この平野部を挟んだ南東側約250mの独立低丘陵(標高25～34m)上には39基を数える古墳が所在している。

調査地の前面および周辺は、水田や畑地として耕作が行われており、調査対象地も果樹園や畑地造成によりかなり改変された現況となっている。

１　横枕38号墳(第８～15図、図版１、４～７、15、16)

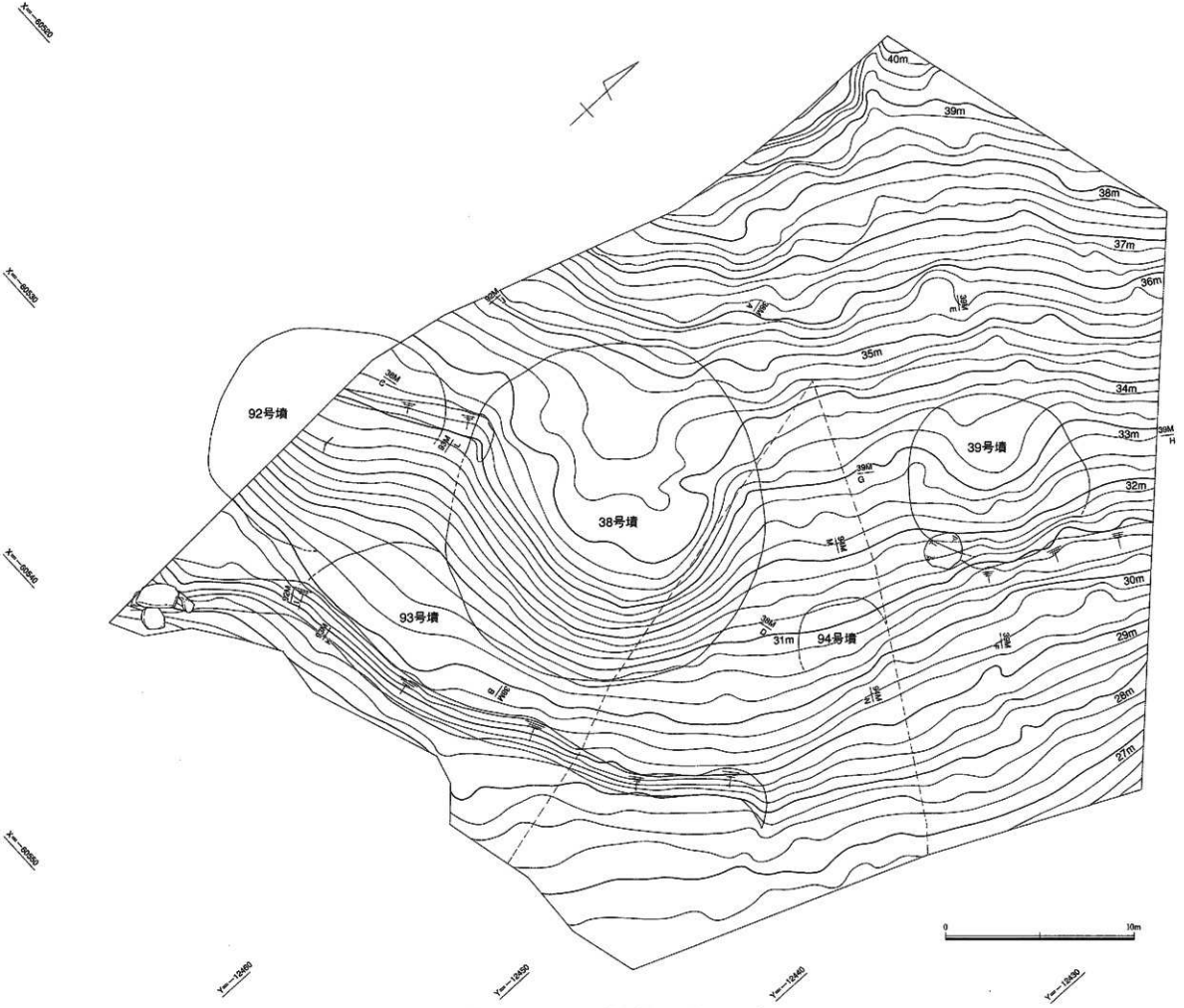
〔位置と現状〕

横枕38号墳は調査地の西よりに位置し、主稜線から下った丘陵裾部の標高30.5～35.5mの緩斜面に立地する。北東側には39号墳が位置し、南西側に92、93号墳が隣接して造られている。調査前の古墳は、斜面の高位を巡る弧状の周溝痕跡がわずかに認められ、墳頂部には径８～９mあまりの平坦面が見られた。南側裾部からみて4.5m以上のはっきりした半球状の高まりが観察され、周辺古墳の中では大型の円墳になることが明らかであった。

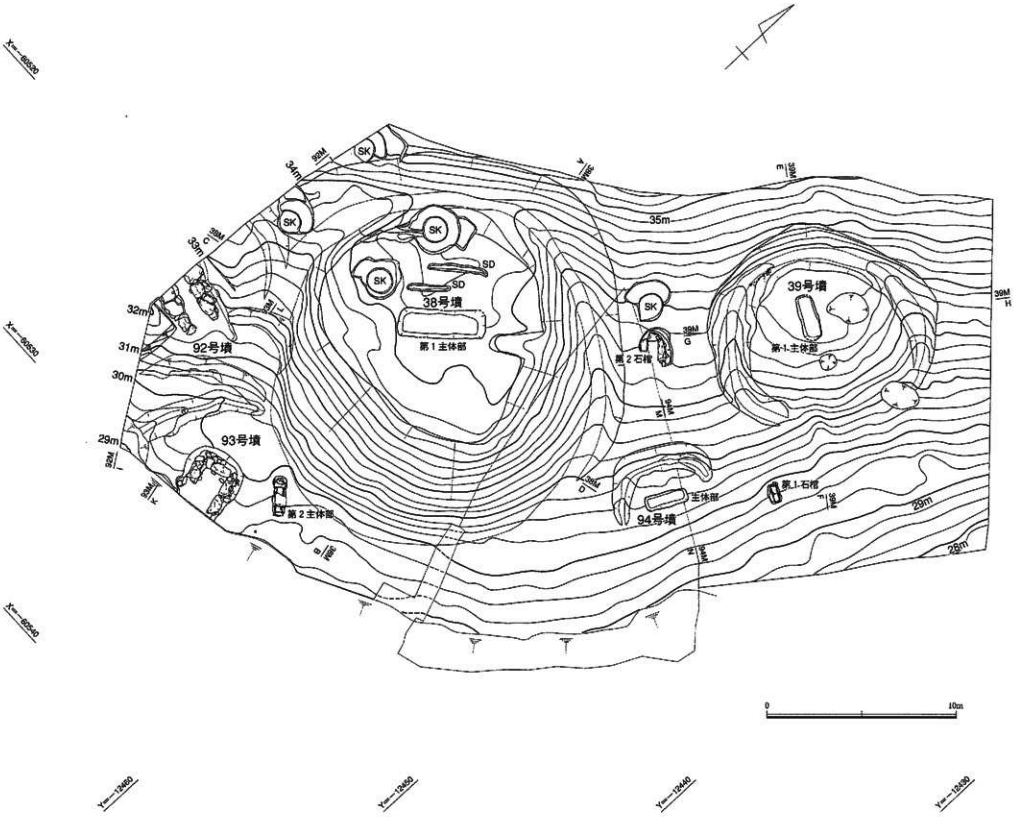
〔墳丘〕

厚さ５～15cmの表土および15cm前後の耕作撹乱土を除去した段階で墳丘面を確認した。墳丘の遺存状態は全体的に良好であるが、墳頂部の西側と周溝西側に果樹耕作に伴うものとみられる複数の肥料穴(SK)や溝(SD)によって撹乱を受けている。墳頂部の標高は34.25m前後を測る。墳丘規模は、南北径18.5m、東西径16.5m、墳丘の高さは南墳丘裾部から4.6m、東墳丘裾部から2.9m、西周溝底から1.95m、北周溝底から0.7mを測る。

墳丘の築造は、斜面の高位側を巡る周溝の掘削と盛土によって行われている。周溝は墳丘のほぼ１/２を巡り、地山を大きく掘削して造っている。周溝の幅は北側で最大4.5m、深さ1.5m前後である。盛土は、基本的に旧表土(37層)の上から行われており、墳頂部南側で厚さ最大1.5mを測る。第10図の29～36層が墳丘築造時の盛土とみられ、段階的に積み上げている様子がうかがわれる。旧表土の残存状況からみて、丘陵裾部の緩傾斜地を利用し、大量の盛土を行って墳丘を築いていることがわかる。



第８図　横枕38・39・92・93・94号墳調査前地形図(S＝１：200)



第9図　横枕38・39・92・93・94号墳墳丘遺存図(S＝1：200)

〔埋葬施設〕

墳頂部から墓壙1基(第1主体部)、南側墳丘裾部から箱式石棺1基(第2主体部)を検出した。

第1主体部(第11図、図版5、6)

墳頂部のほぼ中央で検出したが、墓壙中央部、東壁、北側の一部が耕作に伴う肥料穴によって攪乱を受け原状を失っている。平面形は隅丸長方形で、主軸をN-47°-Eにとる。規模は、長さ4.6m、幅1.51m、深さ45cm前後を測る。墓壙底面は概ね平坦に整えられており、長さ3.88m、幅0.9~1.0mである。墓壙埋土の断面観察から墓壙内に木棺が埋納されていたものとみられ、第11図の2、3、5、21~24、27~30、32~35、43、44層が木棺の裏込土と考えられる。断面から推定して、長さ2.4m、幅50cm前後の木棺が納められていたものと推測される。被葬者の頭位は、鉄刀や玉類の出土状況から南西側に位置すると考えられる。

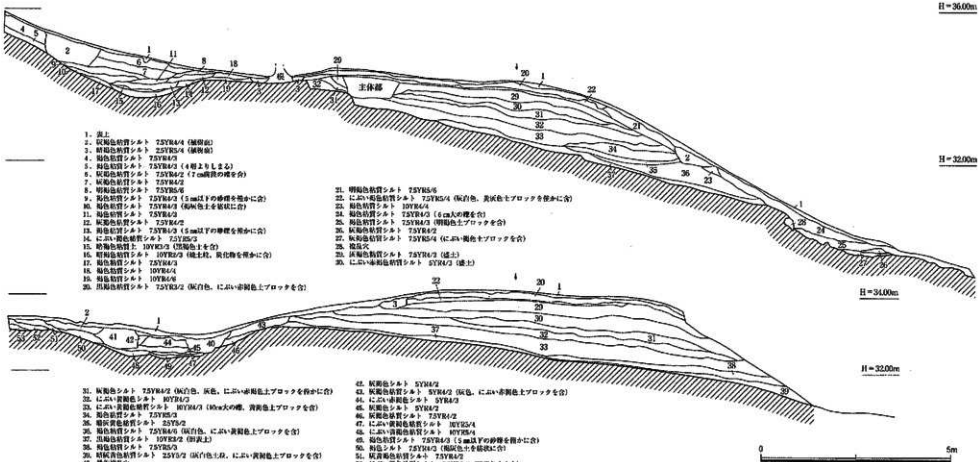
遺物は、須恵器壺杯(1~4)、長頸壺(5)、管玉(6~13)、小玉(14~18)、鉄刀(19、20)、刀子(21、22)、鉄鏃(23~52)が出土した。壺杯と長頸壺はほぼ完形品で、墓壙北側の壁面に沿う状態でまとまっている。杯蓋(1)と杯身(3)、杯蓋(2)と杯身(4)がセットされた状況で出土しており、棺を納めたのち棺外に副葬されたものと考えられる。杯蓋(1)、(2)は口縁部が寸下に下り、端部に段をもつ。杯身(3)、(4)の立ち上がりは内傾し、端部はわずかに段をもつ。いずれも古い要素が残る壺杯である。長頸壺(5)には頸部に櫛描き波状文が2段に施されている。

管玉、小玉、鉄刀、刀子、鉄鏃は棺内に副葬された遺物と考えられる。鉄刀は床面中央からやや南西よりに位置し、切先を同一方向に向け25cm前後の間隔で並列している。(19)は刀身部の一部を欠くが、これは攪乱穴の影響によって失われたものとみられる。刀子(22)は鉄刀(20)の切先に接し、(21)は鉄鏃とともに検出された。玉類は鉄刀の茎側でまとまりを見せるが、管玉の(6、7)は鉄鏃とともに出土した。鉄鏃は鉄刀の切先から50~90cm離れた位置にある。一部に散乱する状況もうかがわれるものの、切先を同一方向に向け、重なり合う状態で出土した。東状にまとめられて副葬された可能性も考えられる。管玉(6~13)は長さ22.1~30.94mm、径10.95~12.39mmを測る。いずれも碧玉製で、片面穿孔である。小玉(14~18)は長さ4.54~6.04mm、径7.71~8.55mmを測る。濃青色および青色を呈し、いずれもガラス製である。鉄刀(19)は刃部の一部を欠くが、出土状態から(20)と同程度の全長を持つものと推定される。茎部に木質痕が残る。(20)は全長83.82cm、刃部70.82cm、茎部13.0cmを測る。全体に木質痕が見られ、茎部には巻き締め痕が残る。鉄鏃は30本あまり出土した。錆化が著しく、癒着しているため形態が不明瞭なものが多いが、鏃身関部に片小爪片逆刺の形態をもつものとみられる(30)、(32)、(39)等も含まれている。

第2主体部(第12図、図版7)

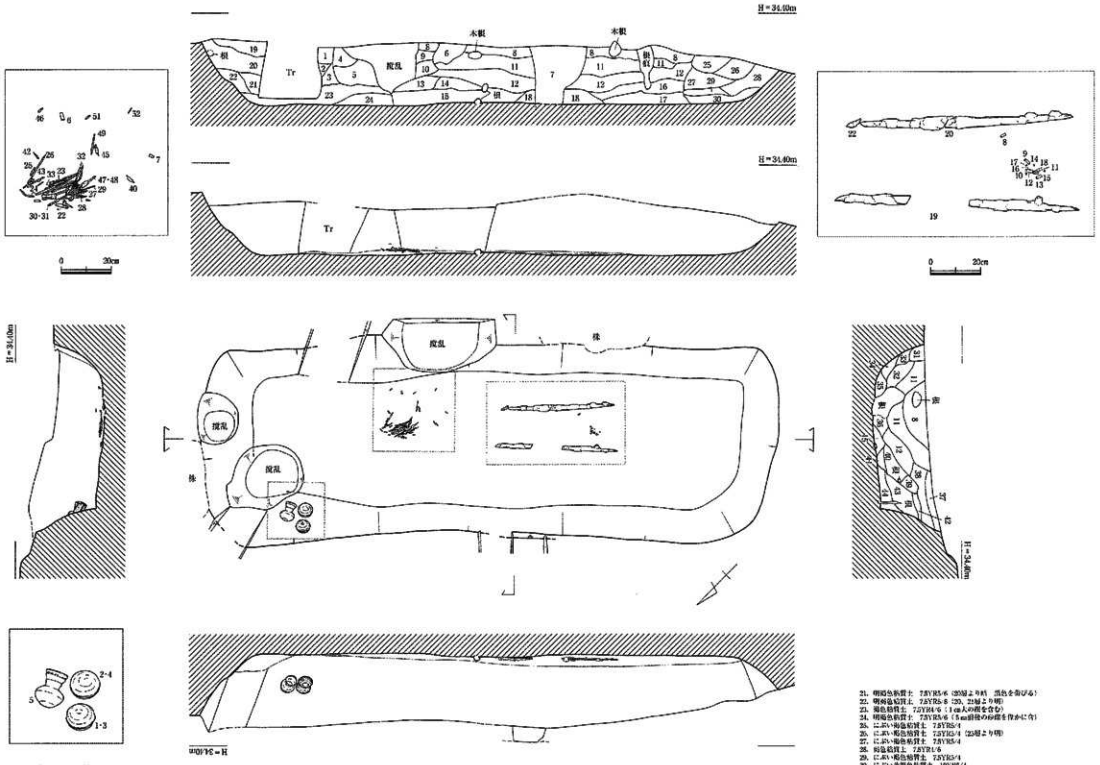
南側の墳丘裾部に位置し、南西側1.7mには93号墳の石室が、北西側8.5mには92号墳の石室羨道部が開口している。埋葬形態は箱式石棺で、表土および畑耕作土を20cmあまり除去した段階で検出した。蓋石は中央部と北西小口の上面に1石が残存するものの、他は欠失しており、棺内は土砂で埋没していた。

石棺は、地山を掘り込んだ長さ2.1m、幅65~75cmの墓壙の中央に設置されている。石棺の主軸はN-45°-Wにとり、規模は内法で長さ1.67m、幅32cm、深さ20~30cmを測る。棺床には敷石等の施設はなく、厚さ8~13cmあまりの褐色粘質土を置き床面を整えている。両小口の幅は北西側がわずかに広く、北西小口側が被葬者の頭位になるものと思われる。石棺の組み合わせは、厚さ3cm前後の板石を用い、側板3石をそれぞれ繋ぎ合わせ、両小口板を挟み込む構造である。棺内から遺物は出土しなかった。



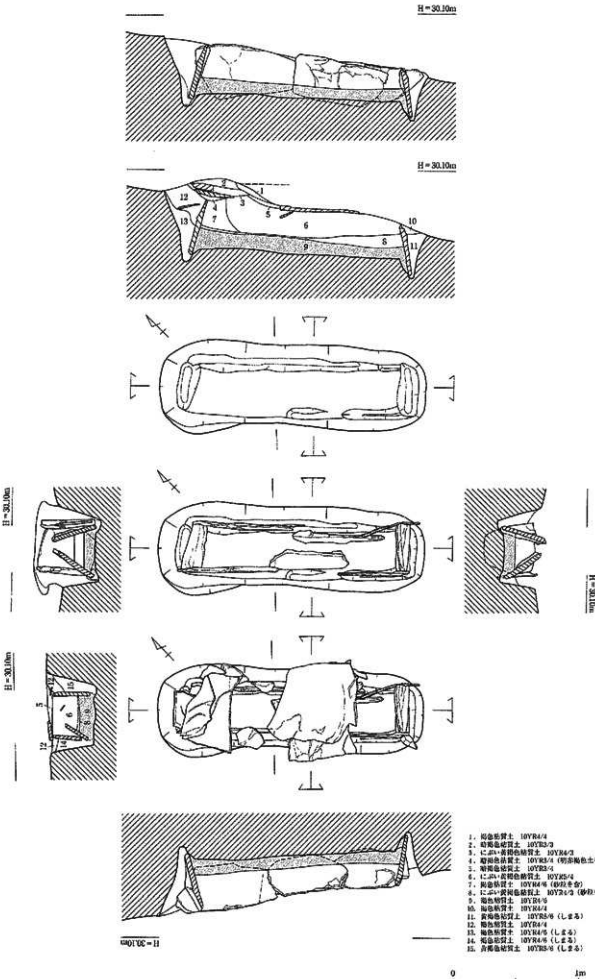
1. 表土
2. 灰褐色粘質シルト　7.5YR4/4（植樹穴）
3. 明褐色粘質シルト　2.5YR5/4（植樹穴）
4. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3
5. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3（4層よりもしまる）
6. 灰褐色粘質シルト　7.5YR4/2（7cm前後の礫を含む）
7. 灰褐色粘質シルト　7.5YR4/2
8. 明褐色粘質シルト　7.5YR5/6
9. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3（5mm以下の砂礫を微かに含）
10. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3（灰褐色土を若干に含）
11. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3
12. 灰褐色粘質シルト　7.5YR4/2
13. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3（5mm以下の砂礫を微かに含）
14. にぶい黄色粘質シルト　7.5Y5/3
15. 暗褐色粘質土　10YR3/3（黒褐色土を含）
16. 明褐色粘質シルト　10YR3/3（褐土粒、黄化物を微かに含）
17. 褐色粘質シルト　10YR4/3
18. 褐色粘質シルト　10YR4/4
19. 褐色粘質シルト　10YR4/6
20. 黒褐色粘質シルト　7.5YR3/2（灰白色、にぶい赤褐色土ブロックを含）
21. 明褐色粘質シルト　7.5YR5/6
22. にぶい褐色粘質シルト　7.5YR5/4（灰白色、黄灰色土ブロックを微かに含）
23. 褐色粘質シルト　10YR4/4
24. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3（6cm大の礫を含）
25. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3（明褐色土ブロックを含）
26. 褐色粘質シルト　7.5YR4/2
27. 褐色粘質シルト　7.5YR5/4（にぶい黄色土ブロックを含）
28. 焼土穴
29. 灰褐色粘質シルト　7.5YR4/2（褐土）
30. にぶい赤褐色粘質シルト　5YR4/3（褐土）
31. 灰褐色シルト　7.5YR4/2（灰白色、灰色、にぶい赤褐色土ブロックを微かに含）
32. にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
33. にぶい黄褐色粘質シルト　10YR4/3（10cm大の礫、黄褐色土ブロックを含）
34. 褐色粘質シルト　7.5YR5/3
35. 暗灰黄色粘質シルト　2.5Y5/2
36. 褐色粘質シルト　7.5YR4/6（灰白色、にぶい黄褐色土ブロックを含）
37. 黒褐色粘質シルト　10YR2/2（炭混土）
38. 褐色粘質シルト　7.5YR5/3
39. 灰褐色粘質シルト　2.5Y3/2（灰白色土粒、にぶい黄褐色土ブロックを含）
40. 焼き固まり
41. にぶい赤褐色シルト　5YR4/3
42. 灰褐色シルト　5YR4/2
43. 灰褐色粘質シルト　5YR4/2（灰色、にぶい赤褐色土ブロックを含）
44. にぶい赤褐色シルト　5YR4/3
45. 灰褐色シルト　5YR4/2
46. 灰褐色粘質シルト　7.5YR4/2
47. にぶい黄褐色粘質シルト　10YR5/4
48. にぶい黄褐色粘質シルト　10YR5/4
49. 褐色粘質シルト　7.5YR4/3（5mm以下の砂礫を微かに含）
50. 褐色シルト　7.5YR4/3（灰白色土を若干に含）
51. 灰黄褐色粘質シルト　7.5YR4/2
52. にぶい褐色粘質シルト　7.5YR5/3（黒褐色土を含）
53. 灰黄褐色粘質シルト　7.5YR4/2

第10図　横枕38号墳墳丘断面図（S＝1：100）

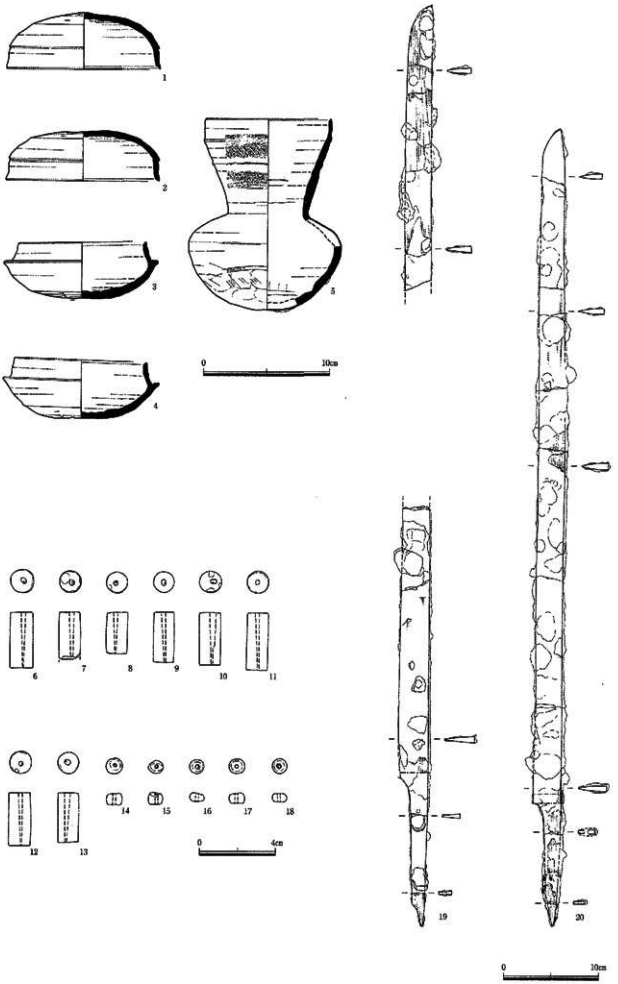


1. 褐色砂質土 7.5YR4/3（1cm前後の礫を含）
2. 明褐色粘質土 7.5YR5/3
3. 褐色粘質土 7.5YR4/3
4. 褐色砂質土 7.5YR4/3
5. 褐色砂質土 7.5YR4/6（3cm前後の軟岩を多く含）
6. 暗褐色粘土 7.5YR3/3（撹乱か）
7. 褐色砂質土 7.5YR5/4（撹乱か）
8. 褐色砂質土 7.5YR4/4（2.5層より明）
9. 褐色粘質土 7.5YR4/3（軟岩粒を僅かに含）
10. 褐色砂質土 7.5YR4/3（9.5層より暗）
11. にぶい赤褐色砂質土 5YR5/4（15cmほどの軟岩を含）
12. にぶい黄褐色粘質土 7.5YR3/1（5cm前後の軟岩を含）
13. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4（3cm前後の軟岩を含）
14. にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4（1cm前後の軟岩を含）
15. にぶい褐色粘質土 7.5YR6/4
16. にぶい赤褐色粘質土 5YR5/4
17. にぶい褐色砂質土 7.5YR5/4（1cm前後の軟岩を含）
18. にぶい赤褐色粘質土 5YR5/3（17層より明）
19. 黒色粘質土 7.5YR4/4（5cm前後の砂礫を含）
20. 明褐色粘質土 7.5YR5/6（1cm大の礫を含）
21. 明褐色粘質土 7.5YR5/6（20層より明、黄色を帯びる）
22. 明褐色粘質土 7.5YR5/6（20、21層より明）
23. 褐色粘質土 7.5YR4/6（1cm大の礫を含む）
24. 明褐色粘質土 7.5YR5/6（1cm前後の砂礫を僅かに含）
25. にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4
26. にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4（22層より明）
27. にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4
28. 褐色粘質土 7.5YR4/6
29. にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4
30. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
31. 黒褐色粘質土 5YR3/1
32. にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4
33. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
34. 明赤褐色粘質土 5YR5/4（2～3cm大の軟山礫を多量に含）
35. 黄褐色粘質土 2.5Y5/4
36. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
37. にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3
38. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4（赤褐色上ブロックを含）
39. にぶい褐色粘質土 5YR6/4
40. 黄褐色粘質土 10YR5/6
41. にぶい赤褐色粘土 5YR5/4
42. にぶい黄褐色粘土 2.5Y5/3
43. 明赤褐色粘質土 5YR5/6（2～3cm大の軟山礫を多量に含）
44. 黄褐色粘質土 2.5Y5/4

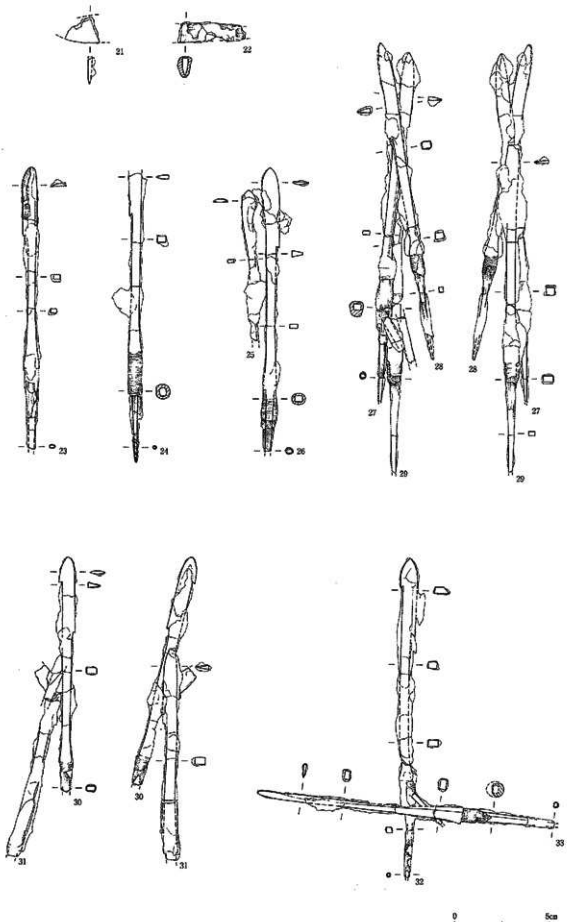
第11図　横枕38号墳第１主体部実測図(S＝１：30)



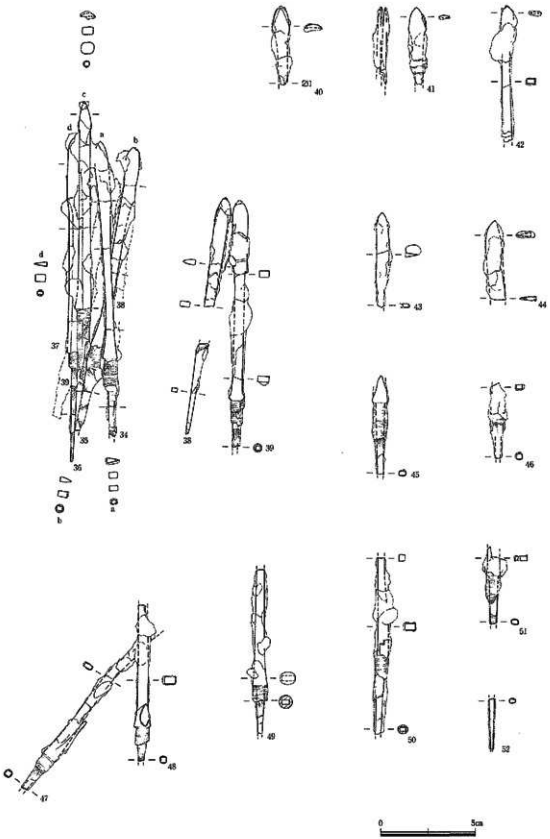
第12図　横枕38号墳第２主体部実測図（Ｓ＝１：30）



第13図　横枕38号墳出土遺物実測図(1)



第14図　横枕38号墳出土遺物実測図(2)



第15図　横枕38号墳出土遺物実測図(3)

2　横枕39号墳（第８、９、16～20図、図版７、８、９、17）

〔位置と現状〕

横枕38号墳の北東約7.5mに位置し、丘陵裾部の標高30.75～34mあまりの緩斜面に立地する。調査前の観察では撹乱穴や削平痕が随所に見られたが、斜面の高位側に弧状に巡る周溝痕跡がわずかに残り、墳頂部にはわずかながら平坦面が認められた。また、南東から見て２m以上の高まりが認められ円墳であることが明らかであった。

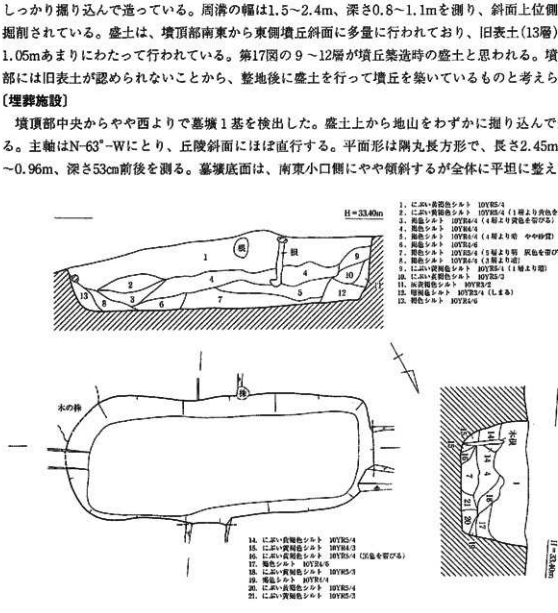
〔墳丘〕

厚さ６～18cm程度の表土を除去した段階で墳丘面を確認した。墳丘の東側と南東裾部は撹乱穴の影響を受けているが、全体的にみて墳丘の遺存状態は概ね良好である。墳頂部は４～５mの平坦面をもち、標高33.2m前後を測る。墳丘規模は、北西裾～南東裾で9.5m、北東裾～南西裾で8.9mを測り、真円に近い円墳である。墳丘の高さは南東裾部2.3m、南西周溝底から1.35m、北西周溝底から0.6m、北東周溝底から1.3mを測る。

墳丘の築造は、周溝の掘削と盛土によって行われている。周溝は墳丘のほぼ２/３を巡り、地山をしっかり掘り込んで造っている。周溝の幅は1.5～2.4m、深さ0.8～1.1mを測り、斜面上位側が大きく掘削されている。盛土は、墳頂部南東から東側墳丘斜面に多量に行われており、旧表土(13層)上に厚さ1.05mあまりにわたって行われている。第17図の９～12層が墳丘築造時の盛土と思われる。墳頂部中央部には旧表土が認められないことから、整地後に盛土を行って墳丘を築いているものと考えられる。

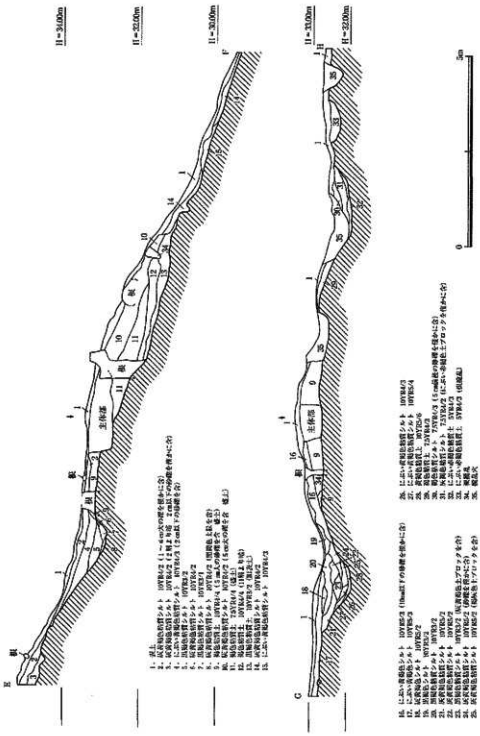
〔埋葬施設〕

墳頂部中央からやや西よりで墓壙１基を検出した。盛土上から地山をわずかに掘り込んで造っている。主軸はN-63°-Wにとり、丘陵斜面にほぼ直行する。平面形は隅丸長方形で、長さ2.45m、幅0.86～0.96m、深さ53cm前後を測る。墓壙底面は、南東小口側にやや傾斜するが全体に平坦に整えられてお



第16図　横枕39号墳主体部実測図（S＝1：30）

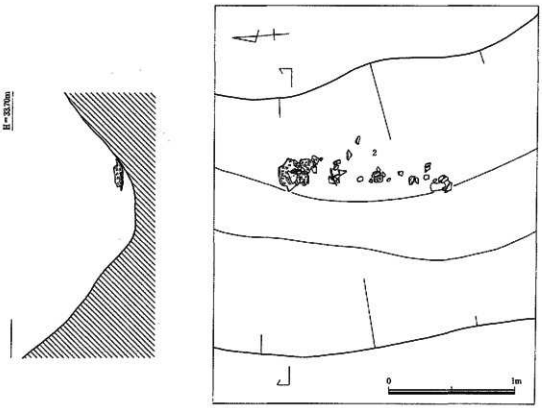
り、長さ2.14m、幅0.67～0.72mである。墓壙埋土の断面観察から、墓壙内に木棺が埋納されていたものとみられ、第16図の8～15、20層が木棺の裏込土と考えられる。断面から推定して、長さ1.4m、幅45cm前後の木棺が納められていたものと推測される。遺物は、埋土上層から土師器細片が1点出土した。



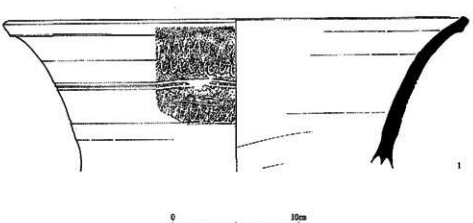
第17図　横穴39号墳墳丘断面図（S＝1：100）

〔出土遺物〕

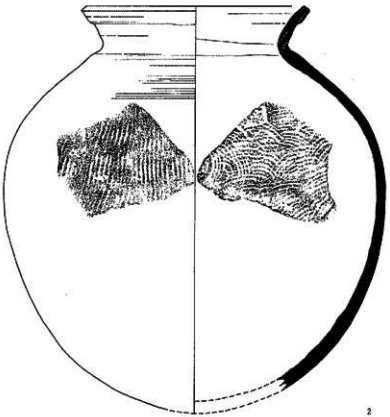
墳頂部から須恵器口縁部(第19図１)、西側墳丘斜面の裾部から壺(第20図２)と、周溝埋土中から刀子(第20図３)が出土した。(２)は墳丘斜面の裾部に位置し、幅50cm、長さ1.4m前後の範囲にまとまった状態で検出された。いずれも破片状態で総数69点を数える。出土状況からは意図的に置かれた状況がうかがわれる。(１)は口縁部１/13残存し推定口径35.6cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部で肥厚する。外面に波状文を施している。(２)は口縁部１/２、体部３/４が残存する。口縁部は短く外傾し、端部外面は面状に肥厚する。口径16.95cm、器高32.2cmである。刀子(３)は切先部を欠き、残存長8.9cmを測る。茎部巻き締め痕が残る。

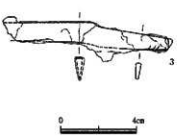


第18図　横枕39号墳周溝内遺物実測図(Ｓ＝１：30)



第19図　横枕39号墳出土遺物実測図(1)





第20図　横枕39号墳出土遺物実測図(2)

〔墳丘外埋葬施設〕

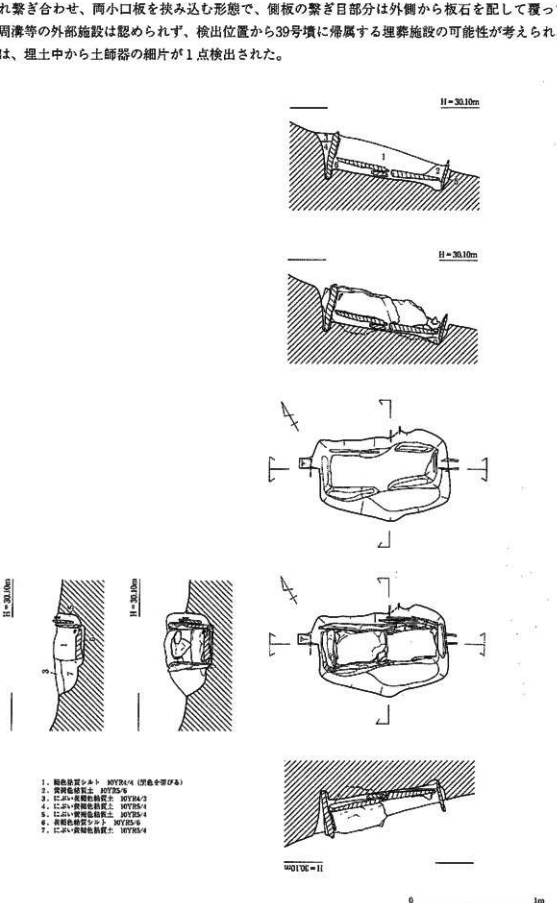
39号墳の南東側から第１石棺、南西側から第２石棺を検出した。

第1石棺(第21図、図版10)

39号墳下位の緩斜面に立地している。39号墳の裾部から南東2.1mに位置し、15cm前後の表土下で検出した。蓋石と側板の一部はすでに失っており、棺内には土砂が流入していた。

石棺は、地山を掘り込んだ長さ1.1m、幅50～64cmの墓壙の東壁よりに設置されている。主軸をN-63°-Wにとり、斜面に沿って組まれている。規模は内法で長さ88cm、幅24～29cm、深さ20cm前後を測り、非常に小形の石棺といえる。棺床は大型の板石を２枚敷き、隙間を小板石でうめて整えているが、全体に南東小口側にかなり傾斜している。両小口の幅は斜面上位に当たる北西側がわずかに広く、西小口側が被葬者の頭位になるものと思われる。石棺の構造は、厚さ３cm前後の板石を用い、側板２石をそ

れぞれ繋ぎ合わせ、両小口板を挟み込む形態で、側板の繋ぎ目部分は外側から板石を配して覆っている。周溝等の外部施設は認められず、検出位置から39号墳に帰属する埋葬施設の可能性が考えられる。遺物は、埋土中から土師器の細片が1点検出された。

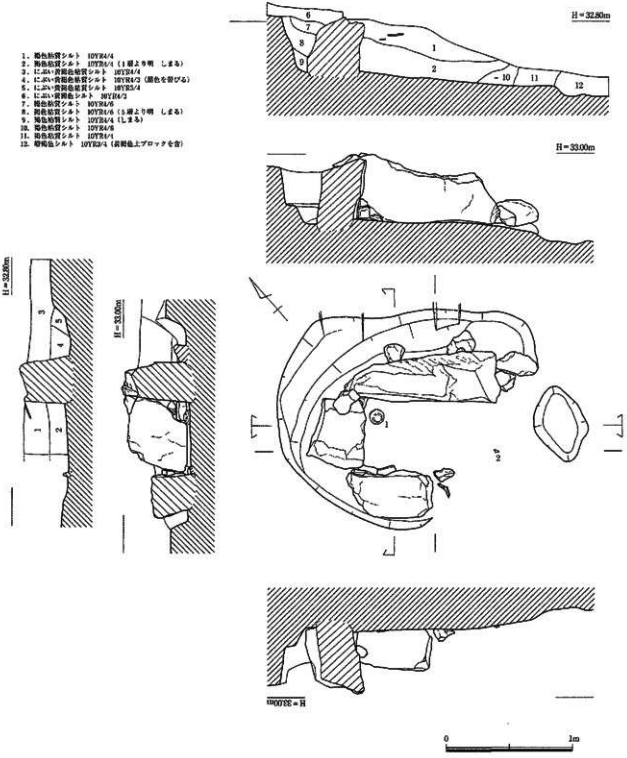


第21図　第1石棺実測図（S＝1：30）

第2石棺（第22、23図、図版10、17）

表土下20～25cmで検出した。38号墳と39号墳間の緩斜面に立地し、39号墳の周溝外に位置している。南西側1.1mには38号墳の周溝が巡る。蓋石、小口石と側石の一部はすでに失っており、棺内には土砂が流入していた。

石棺は、地山を掘り込んだ墓壙のほぼ中央に設置されている。墓壙の南側は削平を受け完存しないが、検出規模で、長さ2.1m、幅1.7mである。棺の主軸はN-53°-Wで、斜面に沿って組まれている。南東側小口石と両側石の一部がすでに抜き取りされているが、小口石を据えた痕跡から、石棺の長さは

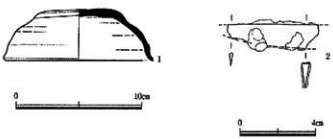


第22図　第２石棺実測図（Ｓ＝１：30）

1.45m前後と推定される。残存部での幅54cm、深さ50cmあまりを測る。棺床は地山を整形して平坦に整えている。石棺の構造は、長さ55～125cm、幅38～58cm、厚さ32～35cmの角石を使用し、側石で小口石を挟み込む形態と、墓壙壁と石棺材の隙間には石材を置き棺の固定を図っている。

遺物は、北西小口側床面から須恵器蓋(第23図1)と石棺埋土から刀子(2)が出土した。(1)は平らな天井部から湾曲して下り、口縁部に段をもつ。口縁端部は丸く納める。推定口径11.5cm、器高4.3cmを測る。(2)は切先と茎部を欠き、残存長4.8cmである。

周溝等の外部施設は認められず、検出位置や出土遺物の時期から39号墳に帰属する埋葬施設と考えられる。



第23図　第2石棺出土遺物実測図

3　横枕92号墳(第8、9、24～26図、図版11、17)

〔位置と現状〕

38号墳の墳丘裾部から南西2mに位置し、緩斜面の標高29.7～33.8mに立地する。古墳の西側約2/3が調査区外となるため、今回は古墳東側のみの調査となった。古墳の現況は、畑地造成に伴う段状の改変が進んでおり原状がかなり失われている。調査前の観察でも古墳の存在を予想することができず、38号墳の墳丘検出時に並列する大型の石材が検出され、横穴式石室をもつ古墳の所在が明らかになった。

〔墳丘〕

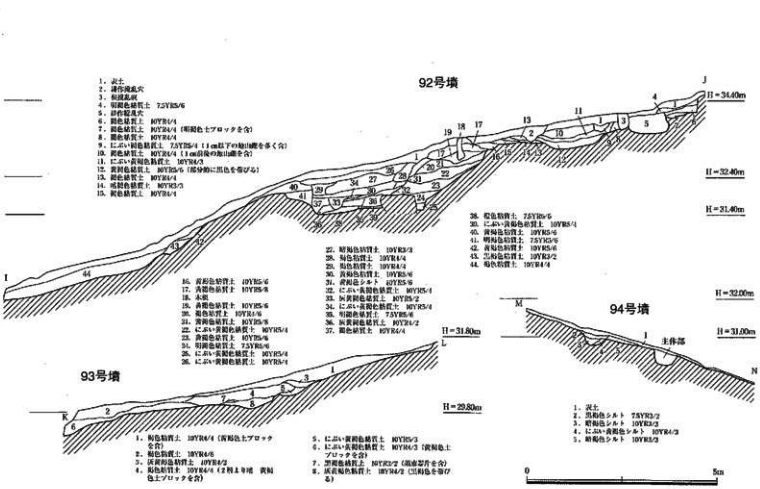
表土下10～30cmで墳丘面を検出した。墳丘部の最高所は標高33.3mを測る。墳丘は、地山整形と盛土を行って築造したものと思われるが、石材の抜き取りによる攪乱や流失によってかなり失われている。盛土は墳丘北側で確認された。第25図の13～16層が地山整形後に置かれた盛土の一部とみられるが、石室の遺存状況から推察して、多量の盛土が行われていたものと考えられる。周溝は墳丘の北側で検出され、地山を掘削して斜面上位側を弧状に区画している。周溝幅1.2～1.5m、深さ40cm前後を測る。墳形は南北径12m前後を測る円墳で、高さは南裾部から3.1mである。

〔埋葬施設〕

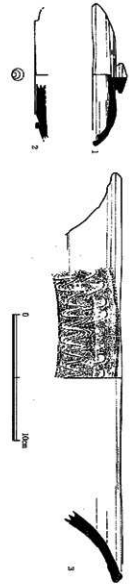
羨道部が検出されたことから横穴式石室を持つ古墳と考えられる。西側が調査区外となり石室の全容は把握できないが、墳丘残存状況から調査区外に玄室が内包されるものと思われる。主軸はN-80°-Wで、東側に開口する。羨道の天井部はすべて失われ、側壁の下部が残存するが、左側壁の腰石についてはすでに抜き取りされておりその痕跡のみが残っている。羨道部の規模は検出長で2.3m、幅1.15mを測る。石室の構築は、地山を大きくカットした掘り方の基底部に腰石を設置し、根石で固定したのち、裏込土(第26図の9～15層や第25図の19～25層、40、41層)を段階的に積み上げて石室を築いているものと考えられる。床面は地山を削って整えており、入口側に若干傾斜している。閉塞施設は検出されなかった。

〔出土遺物〕

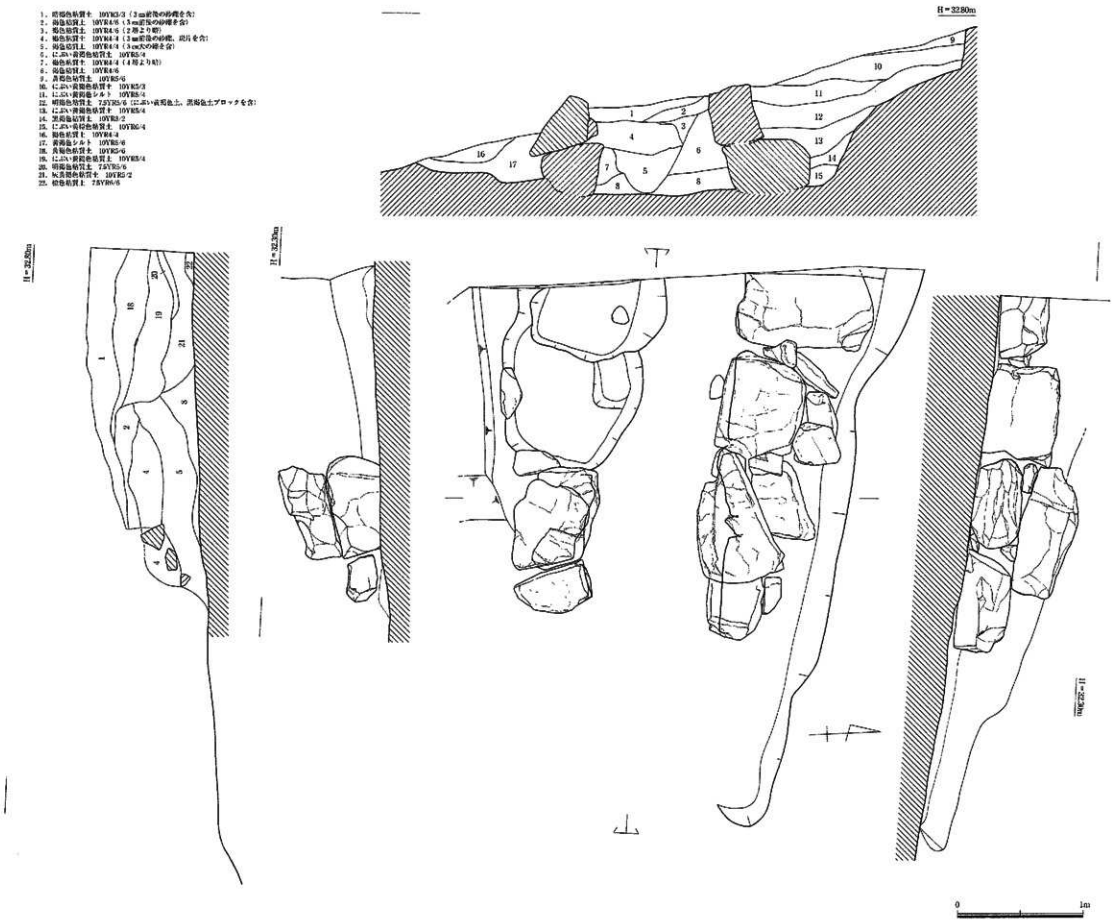
墳頂部表土から須恵器蓋(第24図1)、羨道部攪乱土から須恵器杯底部(2)、羨道部表土から須恵器の甕口縁部(3)が出土した。いずれも原位置を失っている遺物とみられる。(1)は完存し、口径11.0cmを測る。天井部につまみを持ち、かえりは短い。(2)は1/4残存する。高台をもち、底部に糸切り痕が残る。(3)は1/6残存する。口縁部は大きく外反し、端部に面を持つ。外面に櫛描き波状文を施す。



第25図　横枕92・93・94号墳墳丘断面図（S＝1：100）



第26図　横枕92号墳出土遺物実測図

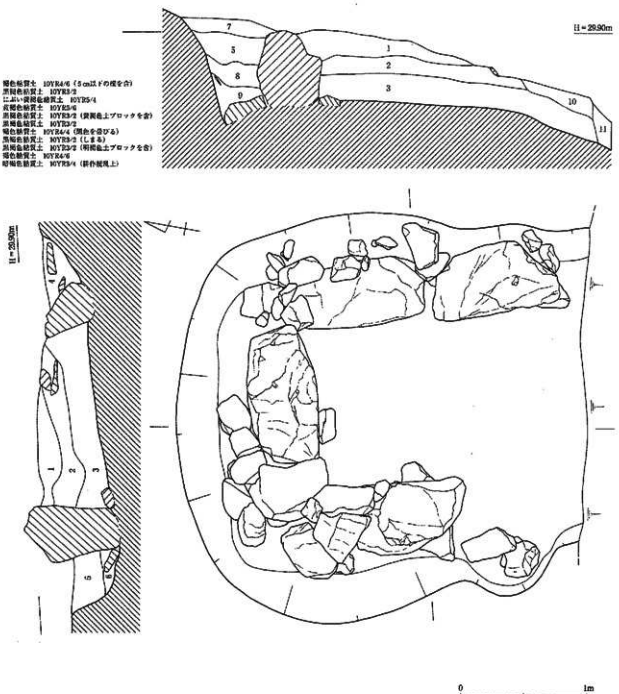


第26図　横枕92号墳石室実測図（S＝1：30）

4　横枕93号墳（第８、９、25、27～31図、図版12、13、17、18）

〔位置と現状〕

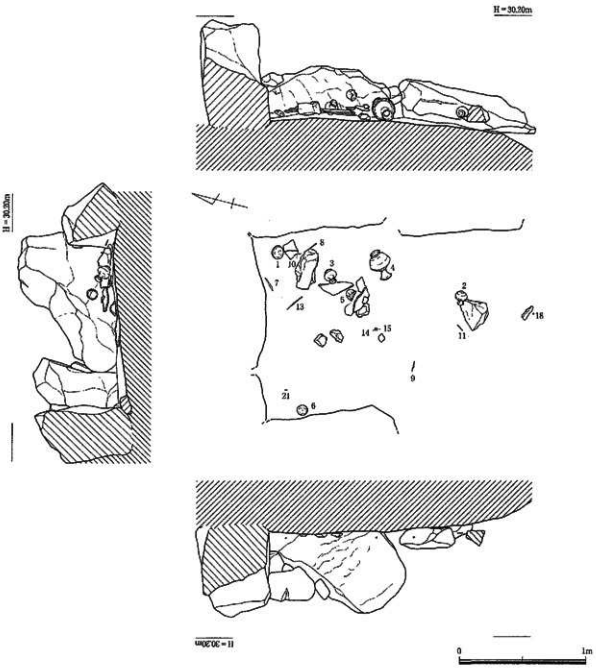
38号墳の南西側に隣接し、丘陵裾部に形成された緩斜面の標高29～30.3mに立地する。北西側の上位には92号墳の羨道部が開口している。調査前の現況は、畑耕作による削平の痕や、高さ1.3m程度にわたって壇上に掘削し畑に改変された状況が見られ原地形がかなり失われていた。現状からは周溝の痕跡や墳丘の高まりはまったく認められず、古墳の存在を予想することができなかったが、38号墳の墳裾部検出時に玄室を構成するものと思われる大型石材が検出されたことから横穴式石室をもつ古墳の所在が明らかになった。



第27図　横枕93号墳石室実測図（Ｓ＝１：30）

〔墳丘〕

表土および耕作土下30～50cmで墳丘面を検出した。墳丘部の最高所は標高30.2m前後を測る。墳丘の築造は地山整形と盛土によって行われており、墳丘の西側で盛土と周溝を検出した。盛土(第25図６層)は厚さ10～30cm程度が残存するが、本来の盛土は石室の遺存状況から推定してさらに１m以上あったものと推定される。周溝は丘陵の上位側を区画し、幅0.7～1.5m、深さ40cm前後にわたって地山を掘削してつくられている。周溝の残存部から推定して径８mあまりの円墳とみられ、墳丘遺存高は南西墳丘裾部から85cmを測る。



第28図　横枕93号墳石室内遺物実測図(Ｓ＝１：30)

〔埋葬施設〕

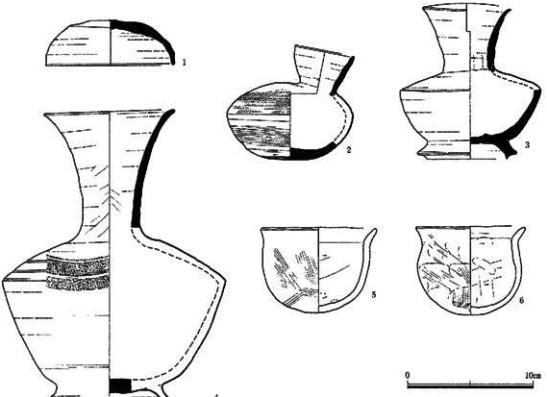
玄室の残存状況から南に開口する横穴式石室と考えられる。主軸はN-16°-Wである。天井部と羨道部のすべてを欠き、玄室の奥壁、両側壁の一部のみが残存している。左側壁羨道側の腰石がすでに失われているが、根石の状況からみて奥壁、両側壁のいずれも２石の腰石を配置して玄室を構築したものと考えられる。玄室規模は、長さ2.1m、幅1.5m、遺存高75cmである。床面は地山を削って整えられており、入口側に若干傾斜している。床面から10～30cm程度の石材が検出されたが、配置に規則性が認められず性格は不明瞭である。

石室の掘り方は、幅2.5～3.2m、奥壁側での深さ70cmを測る。地山を大きく掘り込んでつくられており、掘り方いっぱいに腰石を配置し石室を築いている。

〔出土遺物〕

玄室内の床面と床面からわずかに浮いた状態で須恵器壺(第29図１)、平瓶(２)、台付長頸壺(３、４)、土師器壺(５、６)、刀子(第30図７)、鉄鏃(８～20)が出土した。出土位置は玄室中央から右側壁よりに集中する傾向が見られる。また、周溝から須恵器杯身(第31図23)、高杯(24)、口縁部(25～27)、体部(28)、提瓶(29)、脚裾部(30)が検出された。

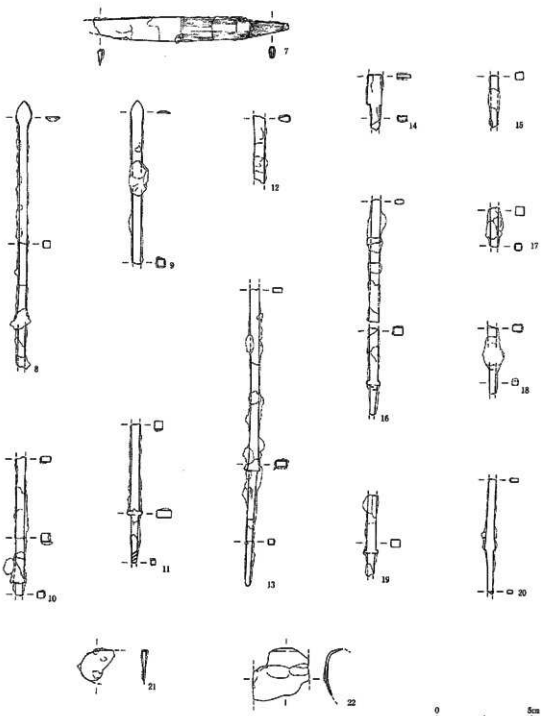
(１)は奥壁の右隅に位置しており概ね原位置を保っているものと思われる。完形で、口径9.9cmを測る。天井部は丸く、口縁部の端部を丸く納める。(２)は羨道部側に位置し、角礫の上に乗る。口径4.7cm、胴径9.9cm、器高9.0cmを測る小型の平瓶である。体部上半はカキ目後ナデ、以下はヘラ削り後カキ目調整を行い、軽いナデで仕上げる。(３、４)は右側壁よりの床面直上に位置する。おおむね原位置を保っているものと思われる。(３)はほぼ完形で、口縁部は外反し、口縁端部を丸く納める。肩はやや張り、底部にハの字形の台部を貼付する。(４)は、肩部を３条の沈線で区画し、連続刺突文を施している。それぞれの器高は12.2cm、23.2cmを測る。(５、６)は同一形態の土師器壺である。(５)は玄室ほぼ中央部、(６)は左側壁の奥壁よりで検出した。口縁部は外反し、端部を丸く納める。体部外面はともに



第29図　横枕93号墳出土遺物実測図(1)

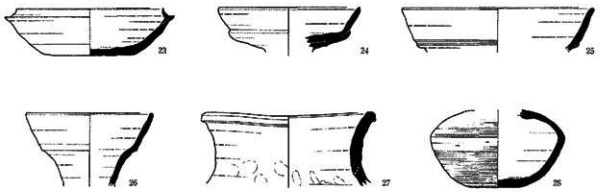
ハケ目調整である。(5)は口縁部1/2、体部3/5、(6)はほぼ完存する。刀子(7)は奥壁真下で出土した。切先を欠き、残存長10.35cmを測る。茎長は刀身長の約1/2で、木質痕が顕著に残る。鉄鏃(8～20)は床面全体に点在する状態で出土した。残存状態が悪く完存するものは見られないが、(11)に巻き締め痕、(13)に木質痕が観察される。(21)の断面形は二等辺三角形を示し、(22)は薄い板状の鉄を湾曲させる。(22)は鞘金具の可能性も考えられるが、いずれも詳細不明である。

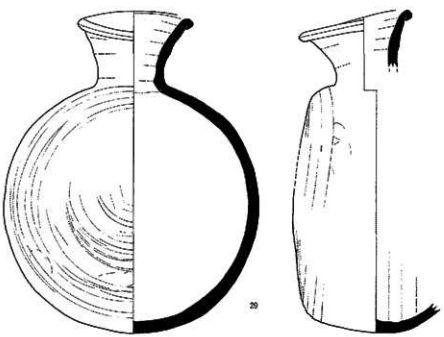
周溝内から出土した(23～30)はいずれも破片状態で周溝埋土から検出された。周溝部およびその上方はかなり攪乱をうけており、流入した遺物が混在している可能性も考えられる。(23)は口縁部1/4、



第30図　横枕93号墳出土遺物実測図(2)

体部1/2が残存する。立ち上がりは内傾し、端部は細る。底部は平らで回転ヘラ切後ナデ調整である。復元口径11.5cm、器高3.7cmを測る。(24)は口縁部1/3、体部1/2が残存する。内外面ヨコナデ、復元口径11.0cmである。(25～27)は口縁部1/3～3/4残存し、ともに内外面ヨコナデ、復元口径は14.8cm、9.8cm、12.8cmである。いずれにも自然釉がかかる。(28)は壺の体部と見られる。肩部1/2、体部3/4、底部完存し、胴部のヘラ削り後に体部はカキ目調整を行う。提瓶(29)は口縁部、体部とも1/2が残存する。口径8.4cm、器高24.5cmを測る。外面背側は回転ヘラ削り後カキ目。(30)は1/8残存する。裾部で屈曲し内傾気味に納める。凸線上位には波状文が施されるがかなり粗雑である。裾部の推定径36.2cmである。





第31図　横枕93号墳出土遺物実測図(3)

5　横枕94号墳(第８、９、25、32図、図版14)

〔位置と現状〕

横枕39号墳の南約3.0mに位置し、標高30.25～31.3mあまりの緩斜面に立地する。西側には38号墳が隣接している。調査前の観察では、墳丘の高まりや周溝の痕跡は認められず古墳の存在は予想されなかった。

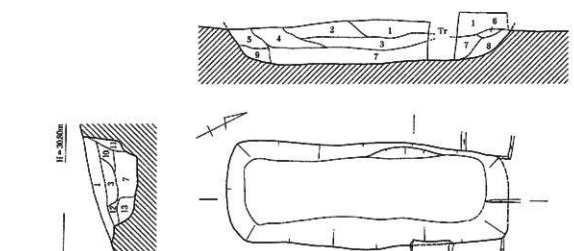
〔墳丘〕

厚さ６～10cm程度の表土を除去した段階で、周溝が検出され古墳の所在が明らかとなった。周溝は、緩斜面の上位側を弧状に巡り、幅0.5～1.3m、深さ30cm前後にわたって地山を掘り込んで造っている。斜面下方側の墳丘裾部が不明瞭であるが、残存部から推定して径５m前後の小規模な円墳と考えられる。墳丘の北西側で確認された第25図の暗褐色土(５層)が盛土の一部とみられるが、他では確認されず、すでに流失したものと推測される。墳頂部最高所の標高は31.0mで、南西周溝底からの高さ0.6mあまりである。

〔埋葬施設〕

墳頂部中央から地山を掘り込んだ墓壙１基を検出した。主軸はN-26°-Eにとり、丘陵斜面に直行する。平面形は隅丸長方形で、長さ2.24m、幅67～80cm、深さ42cmを測る。墓壙底面は平坦に整えられており、長さ1.9m、幅50cm前後を測る。墓壙埋土の断面観察から、墓壙内に木棺が埋納されていたものとみられ、第32図の５、８、９、11～13層が木棺の裏込土と考えられる。断面から推定して、長さ1.5m、幅32cm前後の木棺が納められていたものと推測される。

遺物は検出されなかった。

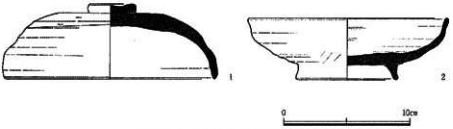


1．褐色砂質土　10YR4/6
2．黄褐色砂質土　10YR5/6
3．褐色砂質土　10YR4/4（１層より暗）
4．にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4
5．黄褐色砂質土　10YR5/6
6．褐色砂質土　10YR4/4（１層より暗色を帯びる）
7．褐色砂質土　10YR4/6
8．褐色砂質土　10YR4/4（７層より暗）
9．にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（黒色を帯びる）
10．にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
11．黄褐色砂質土　10YR5/6
12．にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
13．黄褐色砂質土　10YR5/6

第32図　横枕94号墳主体部実測図(Ｓ＝１：30)

6　遺構外出土遺物(第33図、図版18)

92号墳の南東下位の畑耕作に伴う撹乱土から須恵器蓋(第33図１)と杯(２)が出土した。(１)は口縁部１/13、体部１/２が残存する。天井部にボタン状のつまみをもつ。推定口径16.4cm、器高5.9cmを測る。(２)は高台をもつ杯で、口縁部1/10と底部がほぼ完存する。推定口径15.4cm、底径7.8cm、器高4.9cmを測る。



第33図　遺構外出土遺物実測図

出土遺物観察表

横穴40号墳（第７図）

掲図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④最大径 ⑤推定	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物番号
1	高杯 杯身	① 10.40 ②12.10	立ち上がりは内傾し、端部は張り出だす。 受け部は体部から外方に拡める。	(内外)ヨコナデ。 (外)天井部、時計廻りのヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含む。4mm大の砂礫有。 ②良 ③灰色	(口)一部 (受)1/3		8 11

横穴38号墳（第13図）

1	高杯 杯蓋	① 12.00 ② 4.45	天井部は丸く口縁部は底下にドが り、端部で段をもち外方にこまる。 天井部と体部を分ける稜線は鈍い。	(内外)ヨコナデ (外)天井部凸面を時計廻りのヘラ削り。稜下位は1条の沈線施。他いナデ。 (内)天井中心部一方向のナデ。	①1mm微後の砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰色	ほぼ完存	3とセット関係	29
2	高杯 杯蓋	① 11.90 ② 3.90		(内外)ヨコナデ (外)天井部凸面を時計廻りのヘラ削り。稜下位は1条の沈線施。 (内)天井中心部不明。	①0.5mm微後の砂粒を多く含む。3～5mm大の砂礫有。 ②良 ③灰色	完形	4とセット関係	27
3	高杯 杯身	① 9.00 ②12.10 ③ 4.45	立ち上がりは内傾し、端部は横ナ に段をもつ。受部は体部から水平 方向に拡める。 体部は丸い。	(内外)ヨコナデ (外)体部3/4時計廻りのヘラ削り、中心にヘラ起し痕。	①1mm微後の砂粒を多く含む。 2.5mmの砂礫有。 ②良好 ③灰色	ほぼ完存		29
4	高杯 杯身	① 10.30 ②12.20 ④ 4.70			①0.5mm微後の砂粒を多く含む。2mm大の砂礫有。 ②良 ③淡灰色	ほぼ完存		27
5	須恵器	① 8.73 ② 11.90 ③ 14.85	脚部は底部際に外方に伸び、口縁部で屈上、丸く仕める。 脚部は中上部で最大値を測り、底部は丸い。	(外)口周一列部ヨコナデ。 脚部稜線上端部直径を2段に施す。 作出痕跡明の圧痕、工具痕。	①1～2mmの砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰 (特)灰オリーブ	完形	13横穴関自然物	28

横穴39号墳（第19、20図）

1	(口縁部)	② (35.6)	口縁部は大きく外反、端部で巻反する。	(内外)ヨコナデ。 (外)中位2条、下位1条の沈線で区画、その間に縦状文を施す。下段沈線ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③(外)灰色 (内)淡灰色	(口) 1/13		5 17
2	蓋	① 16.95 ② 20.60 ③ (32.2)	口縁部は短く外反、口縁部端外面を強調に段階させる。 体部は丸い。	(外)叩き目後、回転を利用したハケ目。後一部ナデ。 (内)頂部部ナデ。作部面で工具痕ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②やや良 ③やや灰色 ④灰色	(口) 1/2 (脚) 3/4		1 2 3 4 7 8 12

第２石棺（第23図）

1	蓋	①(11.5) ④ 4.30	平らな天井部から湾曲し、口縁部で段をもち端部は丸く仕める。	(内外)ヨコナデ。 (外)天井部ヘラ切りナデ。 (内)天井部ナデ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む。3mmの砂礫有 ②不良 ③赤褐色	(口) 1/8 (体) 1		2

横穴92号墳（第24図）

1	高杯 蓋	① 11.00 ②(10.40) ③(4.25) ④ 2.70	かえりは短い。	(内外)ヨコナデ。 (外)天井部ヘラ削り。つまみ部貼付後組整ナデ調整。	①1mm以下の砂粒を含む。 2mm大の砂礫有。 ②良好 ③灰色	完形		24
2	(底部)	② (8.30)	底部糸切り痕。	脱化調査なしく不明瞭。 (外)高台部付接ヨコナデ。	①0.5mm微後の砂粒を多く含む。 ②不良 ③乳褐色	(高台) 1/4		3
3	(口縁部)	① (31.2)	口縁部は大きく外反して、端部で肥を得る。	1条の沈線底上位鋸縦き連続文を施す。	①1～2mmの砂粒を含む。 ②良 ③(外)褐灰色 (内)灰色	(口) 1/6	自然物	1 35

横枕93号墳（第29、30、31図）

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④最大胴径 ⑤脚 高	形態・手法の特徴			①胎 土 ②焼 成 ③色 調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	盃	① 9.30 ④ 3.60	丸い天井部から口縁部へ続き、高脚は丸く膨める。	(内外) (外) (内)	ヨコナデ。 天井部縦ヘラ切り後縦いナデ。 天井部一方向のナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③明灰色、褐灰色	完形	口縁部変	10
2	平 瓶	① 4.70 ② 6.80 ③ 9.00	口縁部は外反、口唇端部は丸く仕上げる。肩はやや張り、はぼ全体の比率で広胴。底部は平底。 底部は八の字形の台脚を貼付、内端面で接続する。	(内外) (外)	ヨコナデ。 底部縦ヘラ削り後縦いナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む。 ②良好 ③暗灰色、灰色	完形	自然釉	14
3	台付長頸壺	① 6.75 ② 6.25 ③ 11.55 ④ 12.20	口縁部は外反。口唇端部は丸く仕上げる。肩はやや張り、はぼ全体の比率で広胴。台脚部の先端は丸く仕上げ、底部は八の字形の台脚を貼付、内端面で接続する。	(内外) (外) (内)	ヨコナデ。 台脚部付後ヨコナデ、底部仕上げナデ。 脚部ナデ、底部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む。 ②2mmの砂粒有。 ③良好 ④灰色	ほぼ完形	自然釉	11
4	台付長頸壺	① 10.15 ② 8.90 ③ 17.60 ④ 23.20		(内外) (外) (内)	ヨコナデ。 脚部縦ヘラ切り、台部縦付後ヨコナデ。 脚部縦ヘラ目ナデ。	①1mm～2mmの砂粒を多く含む。 ②2～4mmの砂粒有。 ③不良 ④灰黒色	ほぼ完形		12
5	土師器 壺	① 8.85 ② 6.70	口縁部は外反気味に開き端部は丸い。肩は張らない。	(外) (内)	休部ハケ目。 ヘラ削り後底部ナデ、指ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む。 ②良 ③淡褐色	(口) 1/2 (体) 3/5		13 27
6	土師器 盌	① 8.40 ② 8.10 ③ 6.65	口縁部は外反、端部は丸い。最大胴径を中上位にもつ。	(外) (内)	休部ハケ目。 ヘラ削り後ナデ。 全体に成形痕。	①1mm前後の砂粒を多く含む。 ②1mm大の砂粒有。 ③良好 ④淡黄褐色	(口四) ～部欠 他はほぼ完形	黒斑有	15
23	杯 身	① (11.5) ③ (3.7)	立ち上がりは内傾して端部は細く、受部は水平気味に納める。底部は平ら。	(内外) (外) (内)	ヨコナデ。 底部縦ヘラ切り後ナデ。 底中心部一方向のナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②良 ③灰色。	(口) 1/4 (体) 1/2		30
24	高 杯	① (11.0)		(内外) (内)	ヨコナデ。 杯底部ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③(外)灰色 (内)暗灰色	(口) 1/3 (体) 1/2		29 30
25	(口縁部)	① (14.8)		(内外)	ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③暗灰色	(口) 1/3	自然釉	10 29 32
26	(口縁部)	① 9.8	頸部はゆるやかに外反した後、上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げる。	(内外)	ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰色	(口) 3/4	自然釉	29 30
27	(口縁部)	① (12.8)	外反する頸部は口唇端部で屈曲する。	(内外) (内)	ヨコナデ。 頸部下半ナデ。 底部中央の圧痕。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰色	(口) 1/3	自然釉	29
28	(体 部)	③ 10.50		(内外) (外) (内)	ヨコナデ。 胴部のヘラ削り後体部ヨコ目。指痕、底部ナデ。 底部ナデ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む。 ②良好 ③暗灰色	(頸) 1/2 (体) 3/4 (底) 1	自然釉	29 29 29 32
29	提 瓶	① 8.40 ④ 24.50	体部の側面形は背面より膨らむ扁平形。	(内外) (外)	ヨコナデ。 背面部縦ヘラ削り後ヨコ目。側面部孔周辺に横指痕。ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む。 ②1～2mm大の砂礫有。 ③良好 ④灰色	(口) 1/2 (体) 1/2	自然釉	28 29 30
30	(脚部部)	③ (36.2)	脚端で屈曲、内傾する。	(内外) (外)	ヨコナデ。 凸線上段脚部を波状文を施す。	①1mm以下の砂粒を多く含む。 ②2mm大の砂粒有。 ③良好 ④灰色	(脚部) 1/8		29 30

遺構外（第33図）

1	壺	① (16.4) ②(4.3) ③ (6.9)	留平なボタン状のつまみを持つ。	(内外) (外) (内)	ヨコナデ。 天井部ヘラ割り、つまみ部周辺横回転ナデ調整。 天井部ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を少く含む。 ②やや良 ③灰色	(口) 1/13 (体) 1/2		6 26 29 31
2	高杯付部	① (15.4) ② 7.80 ③ 4.8	底の高さは底部から中央よりに偏倚。	(内外) (外) (内)	ヨコナデ。 台脚部付後横回転ナデ調整。 脚部ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む。 ②良 ③良 ④(高台) 3/4	(口) 1/10 (脚) 1 (高台)		9

横枕古墳群　鉄製品（鉄刀、刀子、鉄鉾）

単位 cm

出土地	遺構番号	器種	全長	茎 刀部 長さ	茎 刀部 断面形	茎 茎部 長さ	茎 茎部 断面形	茎 茎部 計測位置	茎 茎部 幅	茎 茎部 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
横枕40号墳	7周2	鉄 鉾	(18.82)	(6.20)		(12.62)	菱形端縁	鉾身中央部 茎部	2.03 2.40	0.30 0.40	鉾先を欠く。 身は三角形より短く、身先部から先端部に向けて幅を減じる。レンズ状断面で稜なし。鉾部は茎中央端部刀角へ広がり地紋となる。茎全体断面で刀角で平坦の彫り込みをもつ。 鉄板内黒木炭痕。	鉾身先端部欠損。 茎部一部欠。	(137.0)g	1
横枕38号墳第1主体部	13周19	鉄 刀	(70.85)	(54.70)	二等辺三角形	(16.15)	長方形状	刀身切先部 刀身中央部 刀身元部 茎元部 茎尾部	2.40 2.80 3.20 1.85 1.40	0.60 0.70 0.75 0.60 0.40	刀身は鎬部が残存する。 茎部木質痕。 目釘孔2。	刀身中央部欠失。	(324)g 木質痕	22
	13周20	鉄 刀	63.82	70.82	二等辺三角形	13.0	長方形状	刀身切先部 刀身中央部 刀身元部 茎元部 茎尾部	2.47 2.81 3.00 1.72 1.18	0.55 0.70 0.62 0.59 0.33	茎化する。 金属に赤銅痕。 鞘部に木質痕。 目釘孔2。 茎部茎を縛の痕。	先所	645g	21
	14周21	刀子？	(1.80)	(1.80)	二等辺三角形				1.40	0.29			(0.928)g	43

横枕古墳群　鉄製品(鉄刀、刀子、鉄鉾)

単位 cm

出土地	検出年月日	器種	全長	刀部 長さ	刀部 断面形	茎部 長さ	茎部 断面形	関部 形状	関部 関幅	関部 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
横枕38号墳 第1主体部	14国22	刀子	(3.55)			(3.55)	二等辺三角形状		(0.91)	0.32	木質痕。背部に巻き締め痕。	茎一部	(2.383)g	23
横枕39号墳 周溝内	20国3	刀子	(5.90)	(4.80)	二等辺三角形	4.10	長方形状	刀身関部茎中央部	1.10	0.30	錆化する。	切先部欠	(11.936)g	10
									0.65	0.35	種類不明。刀関は錆により不明。茎部全体の錆。			
第2石室	23国2	刀子	(4.80)	(4.80)	二等辺三角形			切先部刀身中位	0.68	0.18	錆化する。	切先部欠茎部欠	(6.289)g	1
									1.30	0.40				
横枕93号墳 石室内	30国7	刀子	(10.35)	(4.65)	二等辺三角形	5.7	長方形状	刀身関部茎中央部	0.80	0.25	錆化する。種類、刀種不明。	錆化部欠	(12.193)g	1
									0.50	0.15	柄の木質は全体におちり痕有。錆化する。茎長は刀身長の約1/2			

横枕38号墳　鉄鏃(第14、15図)

出土地	検出年月日	器種	全長 ①鏃身部 ②茎部 ③鏃部	鏃身部 平面形	鏃身部 断面形 調整区	鏃身部 断面形 調整区	鏃身部 逆刺	逆刺長	茎部 平面形	茎部 断面形 調整区	茎部 断面形 調整区	関部 断面形	関部 断面形 調整区	関部 断面形 調整区	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
						W 幅 T 厚さ			関 側		W 幅 T 厚さ			W 幅 T 厚さ				
横枕38号墳 第1主体部	23	鉄鏃	(14.82) ①3.66 ②7.05 ③(4.2)	片刃形	先端部 W 0.77 T 0.30				台形状?	中央部 W 0.38 T 0.34	長方形	先端部 W 0.39 T 0.17			細身部、茎部に木質痕。	先端部欠	(11.152)g 巻き締め痕 木質痕	26
				平片刃造					角									
	24	鉄鏃	(15.23) ①7.20 ②7.20 ③5.43	片刃形	手元部 W 0.54 T 0.22				台形状	上位 W 0.44 T 0.33	方形	中央部 W 0.48 T 0.43				先端部欠	(11.170)g	24 26
				平片刃造														
	25	鉄鏃	(7.90)							中央部 W 0.35 T 0.20					錆化、一部変質する。25は錆化、側部の為形態不明。		(16.603)g	25
	26	鉄鏃	(14.90) ①4.1 ②7.3 ③(3.5)	片刃形	先端部 W 0.85 T 0.20		0.1		台形状	中央部 W 0.45 T 0.25	長方形	元部 W 0.45 T 0.35				先端部欠	巻き締め痕 木質痕	
				片刃造														
	27	鉄鏃	(15.55) ③(6.50)		中央部 W 0.76 T 0.22					中央部 W 0.40 T 0.24	長方形	元部 W 0.41 T 0.34			錆化、剥離、変質の為形態不明確。	先端部欠	(45.454)g	26
				平片刃造														
	28	鉄鏃	16.93 ③5.93	片刃形?	W 0.71 T 0.28				台形状	元部 W 0.40 T 0.38	方形	中央部 W 0.30 T 0.25				完存	巻き締め痕 木質痕	
				平片刃造														
	29	鉄鏃	(17.16) ③5.75		W 0.73 T 0.20				台形状	中央部 W 0.46 T 0.43	長方形	元部 W 0.53 T 0.34				鏃身部欠 茎端部欠		
				平片刃造														
	30	鉄鏃	(12.40) ①4.00 ②7.00 ③(1.50)		上位 W 0.69 T 0.27		0.1		台形状	中央部 W 0.56 T 0.36	長方形	元部 W 0.44 T 0.27			長頸鏃。鏃身部は他遺跡から例を見ない中空構造を設ず、後端を長くし挿みな逆刺とする。	先端部欠	(22.657)g 巻き締め痕 木質痕	26
				平片刃造														
	31	鉄鏃	(11.27) ①4.00 ②6.80 ③6.42	片刃形	先端部 W 0.70 T 0.25				台形状?		長方形?					茎部 欠		
				平片刃造														
	32	鉄鏃	(16.67) ①4.21 ②7.26 ③5.20	中央部 W 0.60 T 0.33			0.1			中央部 W 0.46 T 0.30	方形	中央部 W 0.34 T 0.33			長頸鏃。	先端部欠	(28.456)g 木質痕	26
				片刃造?														
	33	鉄鏃	(16.33) ①3.96 ②7.96 ③(4.63)	片刃形	中央部 W 0.70 T 0.20				台形	中央部 W 0.33 T 0.28	長方形	元部 W 0.42 T 0.30				先端部欠	巻き締め痕 木質痕	
				平片刃造					長方形									
	34	鉄鏃	(15.02) ①(4.10)	片刃形	下位 W 0.65 T 0.30				台形	下位 W 0.45 T 0.28	長方形	中位 W 0.30 T 0.20			34～39は錆着する。36は短い片茎刺をもつ。	先端部欠	(76.312)g	41
				平片刃造					長方形									
	35	鉄鏃	(15.2) ③(4.5)	片刃形	中位 W 0.65 T 0.30				台形状	中央部 W 0.50 T 0.30	方形	中位 W 0.30 T 0.25				先端部欠	巻き締め痕 木質痕	
				平片刃造					長方形									
	36	鉄鏃	(15.2) ①3.50 ②7.20 ③(4.20)		下位 W 0.60 T 0.20				台形	中央部 W 0.60 T 0.40	方形	下位 W 0.28 T 0.25				先端部欠		
				片丸造					長方形									
	37	鉄鏃	(17.0) ①3.80 ②8.00 ③5.70	片刃形	中位 W 0.70 T 0.29				台形	上位 W 0.58 T 0.40	長方形	中位 W 0.30 T 0.15				完存		
				平片刃造														

横枕38号墳　鉄鏃(第14、15図)

単位 cm

出土面	挿図番号	器種	全長 ①茎身部 ②刺部 ③茎部	鏃身部 平面形	鏃身部 断面形	鏃身部 刺部形	鏃身部 逆刺	鏃身部 平面形	鏃身部 断面形	鏃身部 関部	茎部 断面形	茎部 断面形	形態の特徴	残存状況	備考	遺物収納番号
墳枕38号墳第1主体部	38	鉄鏃	(10.60) ①(5.9)								長方形	上位 W 0.30 T 0.30	鏃身形態不明瞭。	茎部 欠		
	39	鉄鏃	(12.85) ①(3.65) ②(6.90) ③(2.5)				0.1	棘状		下位 W 0.40 T 0.30	方形	中位 W 0.25 T 0.25		先端部 欠		
	40	鉄鏃	(4.12) ①(2.15) ②(2.97)	柳葉形	片丸造	中位 W 0.72 T 0.20		長方形？						鏃身～頸一部	(3.119)g	20
	41	鉄鏃	(4.04) ①(1.20) ②(2.84)	錐堂形	片丸造	中位 W 0.57 T 0.13								鏃身～頸一部	(3.319)g	26
	42	鉄鏃	(7.12)			先端形 W 0.62 T 0.13				中位 W 0.46 T 0.26				鏃身～頸部	(6.814)g	14 42
	43	鉄鏃	(4.95)	片刃形	平片刃造	中位 W 0.75 T 0.25								鏃身～茎一部	(2.248)g	25
	44	鉄鏃	(4.12)	片刃形	平片刃造	上位 W 0.72 T 0.26								鏃身部	(2.0)g	26
	45	鉄鏃	(5.20) ①(1.45) ②(3.75)					台形状			長方形	下位 W 0.34 T 0.27		鏃関部～茎先端部 欠	(5.948)g 巻き留め 鉄 木質痕	18
	46	鉄鏃	(3.99) ①(1.59) ②(2.40)					台形状？		下位 W 0.36 T 0.27	方形	中位 W 0.30 T 0.29		頸～茎部	(5.710)g 巻き留め 鉄 木質痕	15
	47	鉄鏃	(10.66) ①(8.55) ②(2.13)					台形状		中位 W 0.45 T 0.22	方形	中位 W 0.33 T 0.32	錆着する。	頸～茎部	(15.435)g 巻き留め 鉄 木質痕	28
	48	鉄鏃	(8.18) ①(6.45) ②(1.73)					台形		中位 W 0.68 T 0.40	方形	中位 W 0.31 T 0.29				
	49	鉄鏃	(8.70) ①(6.20) ②(2.50)					台形		先端 W 0.70 T 0.30	長方形	上位 W 0.40 T 0.25		頸～茎部	(7.065)g 巻き留め 鉄 木質痕	17
	50	鉄鏃	(9.31) ①(5.10) ②(4.21)							中位 W 0.50 T 0.38	長方形	下位 W 0.32 T 0.25		頸～茎部	(7.630)g 巻き留め 鉄 木質痕	26
	51	鉄鏃	(4.09) ①(1.49) ②(2.60)							下位 W 0.63 T 0.30	長方形	中位 W 0.33 T 0.26		頸～茎部	(3.215)g 巻き留め 鉄 木質痕	16
	52	鉄鏃	(2.64) ①(2.64)								長方形	中位 W 0.30 T 0.26		茎先端部	(0.559)g 巻き留め 鉄 木質痕	19

横枕93号墳　鉄鏃(第31図)

出土面	挿図番号	器種	全長 ①茎身部 ②刺部 ③茎部	鏃身部 平面形	鏃身部 断面形	鏃身部 刺部形	鏃身部 逆刺	鏃身部 平面形	鏃身部 断面形	鏃身部 関部	茎部 断面形	茎部 断面形	形態の特徴	残存状況	備考	遺物収納番号
横枕93号墳石室内	8	鉄鏃	(14.10) ①(1.3) ②(10.2) ③(2.6)	柳葉形	中央部 W 0.80 T 0.25			棘状	中央部 W 0.40 T 0.40					先端部欠	(10.236)g	4
				片丸造				方形								
	9	鉄鏃	(8.6)	柳葉形	中央部 W 0.70 T 0.15			方形	下位 W 0.40 T 0.40					鏃部～茎部欠	(7.213)g	6
				片丸造												
	10	鉄鏃	(7.3) ①(5.65) ②(0.65)					台形状	中位 W 0.30 T 0.30		方形	先部 W 0.38 T 0.38		鏃部～茎部	(6.080)g	3
								長方形								
	11	鉄鏃	(7.35) ①(4.90) ②(2.45)					棘状	中位 W 0.45 T 0.45		方形	下位 W 0.25 T 0.25		頸部～茎部	(5.802)g 巻き留め 鉄	7
								方形								
	12	鉄鏃	(3.15) ①(3.15)	片刃形？					上位 W 0.65 T 0.35				鏃部、上位部第一等辺三角形を呈し、鏃身部断代方形となる？	鏃～一部	(2.794)g	26

横枕93号墳　鉄鏃(第31図)

単位 cm

出土地	坤図番号	器名	全長 ①鏃身部 ②頸部 ③茎部	鏃身部 平面形	鏃身部 断面(上段)断面形	鏃身部 断面(下段)断面形 W T 幅 厚さ	鏃身部 逆刺 逆刺長	頸部 平面形	頸部 断面(上段)断面形	頸部 断面(下段)断面形 W T 幅 厚さ	茎部	茎部 断面形	茎部 断面(上段)断面形 W T 幅 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
横枕93号墳石室内	13	鉄鏃	(15.20) ②(6.65) ③6.10					台形状 長方形	上段 W 0.50 T 0.25		方形		中段 W 0.30 T 0.30		鏃身部欠	(10.79)g 木質痕	2
	14	鉄鏃	(2.9)											錆化著しく、劣落部多く形態不明瞭。頸部の可能性有。	一部	(1.812)g	5
	15	鉄鏃	(2.75) ③(2.75)									長方形	元部? W 0.45 T 0.40		茎部	(1.638)g	5
	16	鉄鏃	(11.10) ②(4.6) ③(4.5)					鏃状 方形	下段 W 0.50 T 0.45						鏃身部欠 先端部欠	(8.926)g	16
	17	鉄鏃	(2.1)					方形	W 0.45 T 0.45						頸部?	(2.662)g	26
	18	鉄鏃	(3.6) ③(3.6)								長方形	長方形	W 0.40 T 0.30		茎部	(2.729)g	9
	19	鉄鏃	(4.35) ②(3.15) ③(1.25)					鏃状 長方形	元部 W 0.50 T 0.40						頸～茎部	(3.592)g	26
	20	鉄鏃	(6.10) ②(3.80) ③(2.30)					台形 長方形	中段 W 0.40 T 0.20		長方形		下段 W 0.30 T 0.20		頸～茎部	(3.236)g	26
	21	不明鉄製品	(1.80)											横置二等辺三角形。		(1.175)g	8
	22	不明鉄製品												幅3cmの薄い鉄板。ゆるやかに弧状に湾曲、平面も弧を描かにもつ。		(3.670)g	22

横枕38号墳　出土玉類(第13図)

坤図No	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物登録番号
6	管玉	29.55	12.39	2.82	0.77	片面	明緑灰色・緑灰色	8.956	碧玉製	ほぼ、1	1
7	管玉	(25.13)	11.85	2.20	(1.25)	片面	明緑灰色・緑灰色	(6.610)	碧玉製	一端部欠(4/5)	2
8	管玉	22.10	11.28	2.05	0.91	片面	明緑灰色・緑灰色	(5.415)	碧玉製	ほぼ、1	3
9	管玉	26.91	11.19	3.01	0.90	片面	明緑灰色・緑灰色	6.578	碧玉製	完存	4
10	管玉	27.86	11.58	3.64	0.78	片面	明緑灰色・緑灰色	7.197	碧玉製	完存	5
11	管玉	30.94	11.51	2.57	0.80	片面	明緑灰色・緑灰色	8.086	碧玉製	完存	6
12	管玉	28.29	11.59	1.97	0.70	片面	明緑灰色・緑灰色	7.581	碧玉製	完存	8
13	管玉	26.86	10.95	2.63	0.63	片面	明緑灰色・緑灰色 暗緑灰色	6.368	碧玉製	完存	9
14	小玉	6.04	8.55	1.82			濃青色・半透明	0.604	ガラス製	完存	7
15	小玉	6.17	7.88	1.46			濃青色・半透明	0.466	ガラス製	完存	気泡有 10
16	小玉	4.54	7.71	1.85			青色・半透明	0.337	ガラス製	完存	気泡有 11
17	小玉	5.36	8.43	1.37			濃青色・半透明	0.552	ガラス製	完存	気泡有 12
18	小玉	4.97	7.95	1.30			青色・半透明	0.468	ガラス製	完存	気泡有 13

第4節　まとめ

横枕古墳群は、鳥取市横枕および竹生、上味野の一部に所在し、横枕集落の後背丘陵と集落東側の独立低丘陵に展開している。古墳は丘陵の主稜線上や緩斜面、裾部に支群をなしながら築造され、群中には全長70mを超える横枕13号墳、全長23mの横枕55号墳などの前方後円墳や、丘陵裾部には横穴式石室を内部主体とする古墳も築かれている。古墳群の構成は今回の調査事例を含め94基あまりを数え、前期、中期、後期の古墳が確認されている。

今回の調査対象地は横枕集落の後背に位置する丘陵上およびその裾部に位置し、丘陵先端頂部(標高85m)から40号墳、丘陵南東斜面を下った裾部(標高30.5～35.5m)から38・39・92～94号墳の計6基の古墳が明らかになった。

今回の調査で検出した古墳はいずれも円墳である。規模的には38、40、92号墳は直径18.5m、13.9m、12mを測り、他は径10m以下の小規模な古墳である。これらの中で38号墳の規模は傑出しており、横枕古墳群中で最も大型の円墳とみられ横枕古墳群の中心的な後期古墳といえる。墳丘の築造は、石室を内包する92、93号墳を除き、基本的に丘陵の高位側に弧状の周溝を掘り込み、斜面低位側に盛土を行うことで築かれている。盛土の規模は38号墳で最大1.5mほどが確認され、39、40号墳についても多量の盛土によって墳丘を築造している。削平を受けた94号墳も墳丘断面観察から盛土の一部が確認されることから同様の築造方法をとるものと考えられる。92、93号墳は地山を掘削し石室基底部を確保したのち、石室の構築と並行して墳丘を盛り上げていく通有の手法がとられているものと推察される。

埋葬施設は各古墳から検出された。埋葬形態には直葬、木棺直葬、石棺、石室があり、40号墳主体部は直葬、38、39、94号墳は木棺直葬、92、93号墳は石室をもつ。38～40、94号墳の中心主体部は墳頂部のほぼ中央部に位置し、墓壙規模は長さ2.24～4.6m、幅0.67～1.51mを測るが、38号墳の主体部は長さ4.6m、幅1.51mと他より突出しており、規模的にも盟主の埋葬施設を示唆している。木棺直葬の38、39、94号墳には墓壙埋土の観察から長さ1.4～2.4m、幅32～50cmの木棺が納められていたものと推測される。石室をもつ92、93号墳については調査区外となることや後世の改変により詳細については不明な点が多いが、横穴式石室を内包しているものと考えられる。93号墳玄室内からは須恵器、土師器などの土器類や、刀子、鉄鏃等の鉄製品が検出されたが、追葬の有無については不明瞭である。石棺は38号墳の墳丘裾部から1基、39号墳の墳丘外から2基検出された。墳丘外に位置する2基の石棺については立地や出土遺物の時期から39号墳に帰属するものとみられる。3基の石棺はともに古墳の中心から離れており、付随的な位置づけで採用されていた状況がうかがわれる。

遺物は埋葬施設、周溝、墳丘から出土した。中でも38号墳の中心主体部の遺物は充実しており、棺内に鉄刀2、刀子1、鉄鏃30点以上、碧玉製管玉8、ガラス小玉5、棺外に須恵器蓋杯2セット、長頸壺1が副葬されている。豊富な鉄製品が埋納されている点が特徴的であり、古墳群における6世紀前半代の中心的古墳であったことをうかがわせる。また、墳丘からの出土遺物として40号墳の墳丘裾部で鉄鉾が検出された。鳥取市域における鉄鉾の出土例は少なく、倭文6号墳と下味野43号墳からの出土が報告されている。いずれも近接する古墳群からの出土であり、多彩な鉄製品を副葬する地域であることを示す資料といえる。

今回調査を行った古墳はいずれも後期古墳と考えられる。丘陵の先端頂部に立地する40号墳と丘陵裾部の中心的古墳である38号墳は6世紀前半の築造とみられ、出土遺物から40号墳が若干先行する可能性が考えられる。39号墳は38号墳より後出の6世紀中頃と思われる。また、39号墳の下位に位置する94号墳は39号墳よりやや後出の築造と推測される。石室を内包する93号墳は出土遺物から7世紀末～8世紀初頭あたりの時期があたえられ、立地的に92号墳がやや先行するものと思われる。

横枕古墳群における調査はこれまでに古墳50基におよぶ。その結果、横枕古墳群では方形墳から円墳への移行が遅れ、中後期にいたるまで箱式石棺はあまり用いず木棺直葬を主流とし、土器転用枕と鉄製品の副葬が目立つ等の特徴が明らかになってきている。また、前期古墳は千代川左岸の平野部を望む低丘陵の稜線上に立地し、中期には主稜線の下位に作られ、後期には横枕集落の背後丘陵上と独立低丘陵の斜面や裾部に築造されることが明らかになってきた。今回の調査結果でも後期古墳の立地や、豊富な鉄製品の副葬、石棺の付随的な使用など過去の調査と同様の結果を得ることができ、多くの貴重な資料を提供してくれた。同一古墳群でこのように多数の古墳を調査した例は少なく、鳥取平野縁辺における古墳期の動向を解明する一助になるものと思われる。

図　　版

調査地全景（南東上空から）

横枕38・39・92・93・94号墳全景（南東上空から）

図版 2

横枕40号墳
調査前
（南西から）

横枕40号墳
全景
（上空から）

横枕40号墳
全景
（南西から）

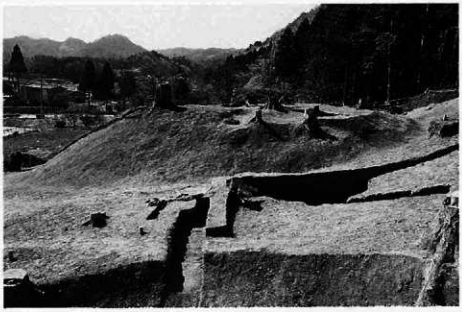
横枕40号墳
主体部検出状況
（南東から）

横枕40号墳
主体部埋土状況
（南西から）

横枕40号墳
周溝埋土状況
（北西から）

図版 4

横枕38号墳
全景
（上空から）



横枕38号墳
墳丘遺存状況
（北東から）

横枕38号墳
周溝埋土状況
（西から）

横枕38号墳
第１主体部検出状況
（南西から）

横枕38号墳
第１主体部検出状況
（北西から）

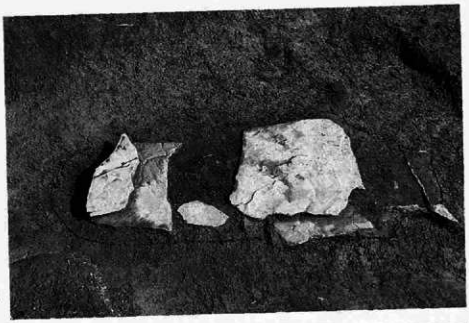
横枕38号墳
第１主体部埋土状況
（北東から）

図版 6

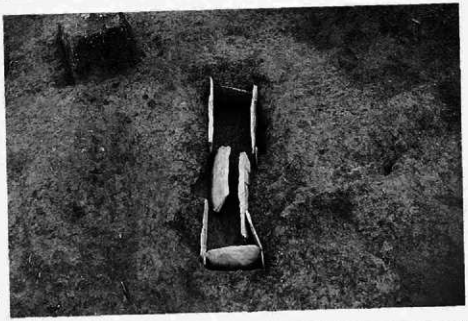
横枕38号墳
第１主体部遺物出土状況
（北西から）

横枕38号墳
第１主体部遺物出土状況
（北東から）

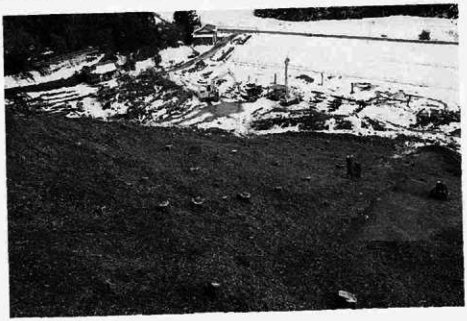
横枕38号墳
第１主体部遺物出土状況
（北西から）



横枕38号墳
第 2 主体部蓋石遺存状況
（南西から）



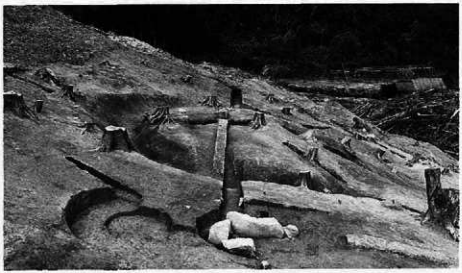
横枕38号墳
第 2 主体部石棺検出状況
（南東から）



横枕39号墳
調査前
（南西から）

図版 8

横枕39号墳
全景
（上空から）

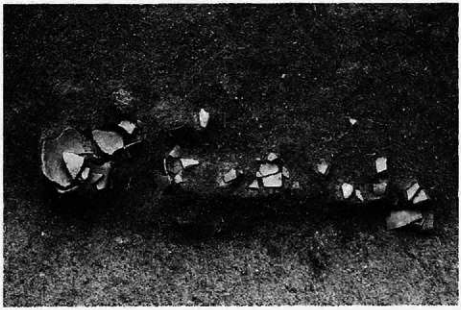


横枕39号墳
墳丘遺存状況
（南西から）

横枕39号墳
周溝埋土状況
（南東から）

横枕39号墳
主体部検出状況
（北西から）

横枕39号墳
主体部埋土状況
（南東から）



横枕39号墳
周溝内遺物出土状況
（西から）

図版10

第１石棺検出状況
（南西から）

第２石棺検出状況
（南西から）

第２石棺遺物出土状況
（南東から）

横枕92号墳
全景
（上空から）

横枕92号墳
羨道部遺存状況
（東から）

横枕92号墳
羨道部埋土状況
（東から）

図版12

横枕93号墳
全景
（上空から）

横枕93号墳
石室埋土状況
（西から）

横枕93号墳
玄室検出状況
（南から）

横枕93号墳
周溝埋土状況
（北東から）

横枕93号墳
玄室内遺物出土状況
（西から）

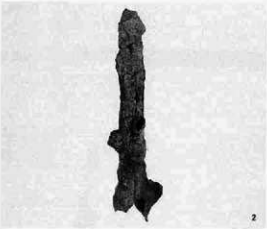
横枕93号墳
玄室内遺物出土状況
（南から）

図版14

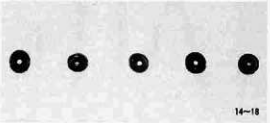
横枕94号墳
全景
（上空から）

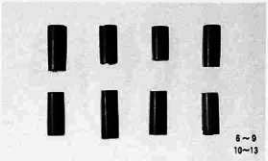
横枕94号墳
主体部検出状況
（北東から）

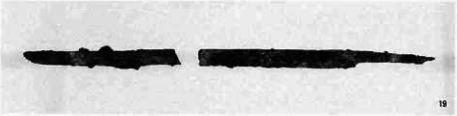
横枕94号墳
主体部埋土状況
（北東から）



横枕40号墳出土遺物

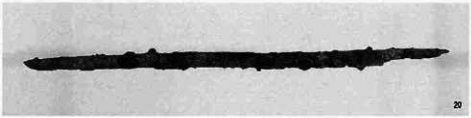


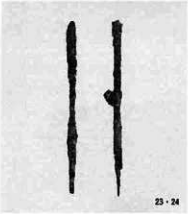


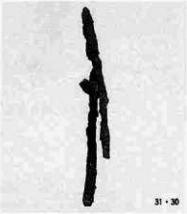


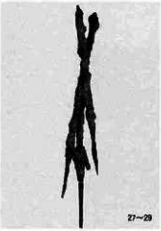
横枕38号墳出土遺物

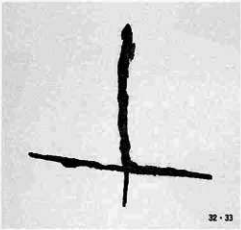
図版16

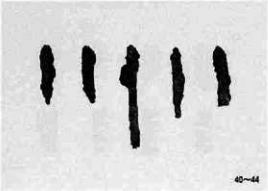




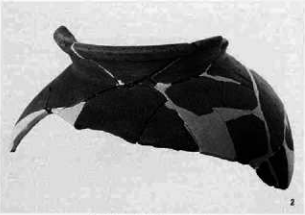








横枕38号墳出土遺物



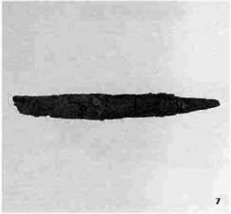
横枕39号墳出土遺物

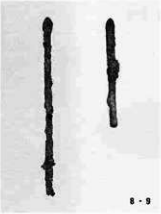
第２石棺出土遺物

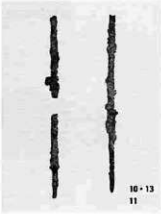
横枕92号墳出土遺物

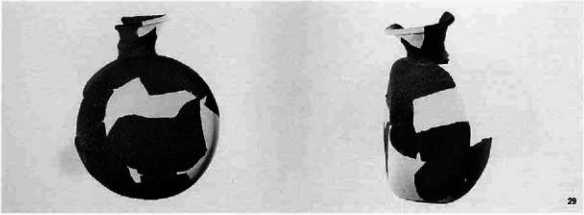
横枕93号墳出土遺物

図版18









横枕93号墳出土遺物

遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	よこまくらこふんぐんⅢ
書 名	横枕古墳群Ⅲ
副 書 名	中国横断自動車道姫路鳥取線に係る横枕38～40・92～94号墳の発掘調査
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	前田 均
編 集 機 関	財団法人 鳥取市文化財団
所 在 地	〒680-0197 鳥取県鳥取市国府町町屋305-1 TEL（0857）23-2410
発 行 年 月 日	西暦2007年（平成19年）12月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
よこまくらこふんぐん 横枕古墳群	とっとりしかみあじの 鳥取市上味野	31201		35° 27′ 30″	134° 11′ 32″	H171201 ～ H180330 H190801 ～ H191130	1,160	道路建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特記事項
横枕38・39・40 92・93・94号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設 石室2 石棺3 土壙墓4	土師器 須恵器 鉄製品 鉾、鉄刀 刀子、鏃 玉類 碧玉製管玉 ガラス製小玉	

横枕古墳群Ⅲ

—中国横断自動車道姫路鳥取線に係る
横枕38～40・92～94号墳の発掘調査—

平成19年12月20日　印刷・発行

編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団
印刷所　勝美印刷株式会社